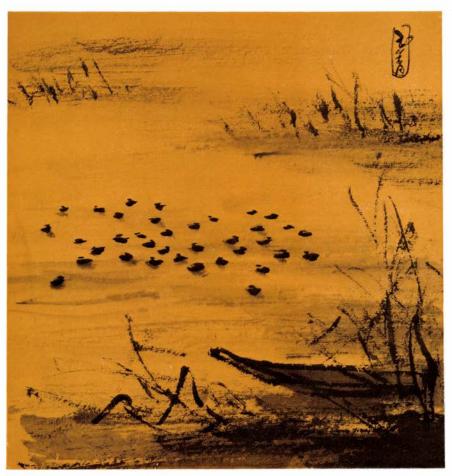
日川協加盟

川柳塔



No. 618

同人特集・はたらくうた

十一月号

高橋操子川柳句集

「千亀利 | (川柳塔社·発行) 刊行記念句会

会賞謝席

兼柳

会 日

各題二句

Ħi.

(句集・記念品

同

題話

袴

場時

23

日

1

昭 和 鉄海 版本線 (電話 53 ル 月

称・岸和田町 10724回 東田田 和駅 39

尾村本沢本 車ま

--選選選選選應

展の仕和

れ入

示んれ

岸川岸

和田柳 め11月15

化塔

文

協

596片

九八

9 九 日ま

和田川

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ







心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 南海難波駅構内店 虹のまち鹿鳴店 京阪デパート 淀屋橋サン・ストア 近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店・布施店)



-年が短かい

の学年末と同様、

験のたまものか、

頭の回転がにぶると、

ととのえる。あわただしさの中に吞み込んだ要領とでも言うのか、長年の経

悲鳴をあげながら救急車に乗って一潟千里。なんとか形を

時々われ乍ら感心することがある。

老いぼれると言うではないか。

ジンを大切に扱うてゆかずばなるまい。

のち短かし恋せよ乙女ではないけれど、

当分の間は、 最

後の 油の一

滴が切

着な気になって、 の仲間に入れて貰えないらし。 B いが一日も B いの いやいの 11 何 ほ か かの本で読んだ。 却ってのんびり落ちついて終う。それでも結局は怠け学生 0 日が短かく一年は長いという。 ど ついて来る。 一日が長いなどと感じた事はめったにない。 丰 品 スケジュウルがつまってくると、どれもこれ ええ、 師 しからば現在の私はどうだろう。一 0 ままよ。そろそろやろうかいと、 4 1 歳をとると一年が短かく 111 グ

まだ老人

一年は短

73 主 秋 難 たさ ず 繭 हिंड 3 2 お 0 0 静 酌 気 T it 付 な 3 表 1) 13 庭 2 T 面 0 挨 は 仲 芝 拶 1 WD 居 W 位 n 笑 £ 12 T 15 2 بخ 奉 15 H £ n 3

中 島生々

JII 柳 塔 月 号



夫婦ようそろ

尼 緑之助

っつける。 島根県の異彩、堀江正朗・芳子の夫婦作家。 島根県の異彩、堀江正朗・芳子の夫婦作家。

季節もの季節に喰べて有難し	私の句	座右の句	編集後記	「ノルマ」岡村	一路集「祝 日」加	「宮詣り」岩	各地柳壇(佳句地10選)中	本社十月句会	柳界展望	大萬川柳 「出 口」	初歩教室本	雅号ぶっちゃけばなし神	兼· 席題課題表樫	岸南柳翁逝く菊	柳友・鳥居金矢氏を憶う福	大陸川柳同好会に出席して西	大坂形水様藤
本			Ξ	村	蓝	Ш	筋	腐		村	田	神夏磯	谷	沢	H		沢
間	弘	N	夫	久志	原貞山	美	Ξ	腐佑・		好	恵				5-10	尾	
満	生	y	菜子			代	幸	整理		郎	\equiv	道	寿	小松園	Ţ		桓
満津子	O	奏	(一三夫・葉子) …	選…	選	選	選	整理) ::	į	選	朗	子 ::	馬	園	路	栞	夫
)	$\widehat{75}$	59	58	58	$\widehat{71}$	66	$\widehat{64}$	$\widehat{62}$	$\widehat{60}$	63	73	56	48	46	28
	Carrie										_	_				_	

鏡台へ娘らしさが目立って来 子に会えるまだ夜が明けぬ駅に佇ち めでためでたでひとり娘をもってかれ 〃 子供らに呼吸合わせてジャズを聞く そして孫 "

入院の時 片目だけ浄土へ先に行っちまい 同時ではないが、正朗眼球手術、 孫去んだ佗しさ一杯よけに飲み 孫に乳房吸われて遠き日を想う 芳子病気

たユーモアが真骨頂 夫よりきつい小言を子にもらい くよくよしない。どこかに余裕をのぞかせ 病むひさし指輪くるりと向きを変え 正月さんもうお帰りか子らが去ぬ 芳子

平等を神停電の名の許に 正朗

はライバルだと断言する。 迫力として共感を捉える。夫婦仲でも作句上 前向きの明るさ、割り切りの早さ、それが セットした髪を夫の手で見てもらい 満月が見ている安堵梅を干す 妻の目を借りて湖上の雪景色 芳子

八間正朗・芳子の涙ものぞいていただく。 妻の目が子の目がみんな僕の目だ 泣くまいと力んだ頰がまた濡れる **ស閉ず耐える苦痛が洩れぬよう** 快活な句ばかり作っているわけではない。 芳子



西

尾

栞

選

桜井市 岩 本 雀踊 子

無人駅子守りの少女に唄がある 雑布を洗って落ち付き戻す女 権力を握り系図を書きかえる もらい手のない子猫をすてる日を選び ひそと住む男の虫歯痛むなり 善人の十 指合わすと善人の影になる 指は拳 作らない 美弥市

安平 次 弘 道

紅一点今日は小皺が気にならず 保護色を信じ弱者はあわてない シャンデリヤことは本音の出せぬとこ

方 とにかく手を握り

敵の敵は味

背かれて背いて女の友情か

かげの花のいのちは分を識る

八尾市 高 橋

夕 花

> 変り身の秋の速さを憎むべし 夕ぐれの厨に母のいる温み 女が泣くとどこかで狐雨が降る 大阪市

春からの一枚の絵がまだ画けず 秋が来てうれしくなっている鏡 創刊号が届いて少し若くなる

友達と言う字をきれいに書きたがる 筋の川の如くに添い遂げる

和歌山市

野

村

太茂津

紙撚りが定年残したピンと立ち そっとして置けとは意識の隅にあり 忌憚なく話していとぐちの ない女

決着のつかぬストロー 人情と義理におぼれる俺が好き は指に巻き

米子市

八 木

Ŧ 代

4

11

出

智

子

	会あ 松香ら棲満 せはあ逢を てと心るち せきいの 迎水にむ期 て家いうし おはの願た 絵がるに た子 え妻金闇に くに車警ま ん泣彩いが にくれいが るよはも合 れ帰接官す なけのきる なるれ	きがくるとれがほんまに怖お きがくると秋風吹いてく せ絵になる柳見つけたり でおんなは千切れ雲を追 とは泣けばではんが吹き とは泣けばではんが吹き とは泣けばではんが吹き とは泣けばではんが吹き をしますへ最低線が来た は家に帰ってから笑い せてくれた頃なら勝って が迎えることもある かたい人のイニシアル 会いたい人のイニシアル	きがくると秋風吹いてくる せ絵になる柳見つけたり を	きがくると秋風吹いてくる せ絵になる柳見つけたり を絵になる柳見つけたり ちたがる足並など忘れ ちたがる足並など忘れ る願いきらめく如露の水 心の彩の花が咲き 心の彩の花が咲き とは泣けばごはんが炊けません ておんなは干切れ雲を追い なきう警官は怖くなし あい車接触からの縁 あい車接触からの縁 は家に帰ってから笑い は家に帰ってから笑い は家に帰ってからまっていた をしますへ最低線が来た あらいまされた頃なら勝っていた は家に帰ってから美い ながいたらもう二十 あの子がいたらもう二十 あの子がいたらもう二十	で 戸田 古 方	青森市 工 藤 甲 吉 お任せをし おっことを覚えてからの不倖 おつきあい 金数うことを覚えてからの不倖 おつきあい おっとあいまされで多りで老人にされてくやしがり 弁護士は家 おっとあいまされであるがと男やもめは並ばされ 白衣着せて 白衣着せて	天水にいのちを任す文化国 大阪市 本 多 柳 志 旗を持ちた カー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
--	---	--	----------------------------	--	----------	--	---	--

老の夏スタミナ食を胃が受けず 豆台風雨だけ持って来てたもれ 豆台風雨だけ持って来てたもれ	ルなら何時でも飲める水不足 辺で別れましようよ辻がある みマン奈良の鹿にも似たりけり スマン奈良の鹿にも似たりけり	を町は句集もベストドレッサー が三角形の顔で胃薬の人で居る 逆三角形の顔で胃薬の人で居る がの虫にされて合同慰霊祭 小の虫にされて合同慰霊祭	飲め飲めの猪口をこの頃逃げる老い 素裸へ殺せ殺せとくる蝿か 素裸へ殺せ殺せとくる蝿か 素裸へ殺せ殺せとくる蝿か	うかぬ顔のホステス微熱の子をかかえできることならばこのまま溺れたし木の葉髪黒いのばかりじゃなかろうか
市	西	Л	河	
場	森	П	村	
没食子	花	弘	日	
子	村	生	満	
金持ちの尻尾は語りに落ちて出るステッキで散歩功成り名を遂げる色褪せてまで散るすべもなき造花仲人の古式豊かな美辞麗句東	子と同居幸せばかり見せて老い対しさをどこで忘れた娘が育ちめさしさをどこで忘れた娘が育ち弱いのネ貯めた盃のんでくれる。	歯が二本のぞいた瞳に見つめられ 今頃の子育てピアノでんとすえ えれは別れたままの母子家庭 竹槍は絶対ご免と竹はのび 島間	神社でも流行らぬとこと流行るとこかになるの策戦タイム 昼寝する ばくの策戦タイム 昼寝する ばくの策戦タイム 昼寝する	週休二日男いよいよ嵩高い女秘書ゴマ擦り序列見て嗤う
まる 花 東京都		根県	竹原市	大阪市
都山	I	藤藤	ш <u> </u>	
京都 山 根	Į	藤井	^中 山 内	不二田
都山		藤藤	ш <u> </u>	

墓本家分家が久し振るの原因ゴルフとは温めの原因ゴルフとは温いと対話敵意は目がのかいるとは温います。	貞操の危機ですおんな酔が覚め似たような過去あり寡婦を寡婦かばう似たような過去あり寡婦を寡婦かばうななんているらいの人類がでいる。	がめてカレーにしぬのがけつまずきれよの風の向き	ないただく栗のイガ 健康法三日坊主の本を閉じ 健康法三日坊主の本を閉じ を取の中途でロマンが欲しくなる を取るで上れば二階の売場です	で で で で で の 方には 見放なされ で の 大阪市 で の 大いる 手相を 易者ほめちぎり の の で に は に に に に に に に に に に に に に
島	両	ł	公	中
居	JI]	2	本	JI]
百	洋	ţ	忠	滋
酒	R	9	Ξ.	雀
英霊の歳をかぞえる終戦日 英霊の歳をかぞえる終戦日 を関説にほめられ野球負けている 作業帽横を向いてる昼のめし を動いてる昼のめし	のとことなりのいこして義也状い女ですかと鏡の奥に問う い女ですかと鏡の奥に問う しみは泳ぎが上手おぼれてはくれぬしみは泳ぎが上手おぼれてはくれぬ	要領の悪い父の袖カバー親を親と思わぬ子等へ金残す親と思わぬ子等へ金残すが書のないドラマの泣き笑い	おれただけで今夜がりが妥協の顔へがりが妥協の顔へ	にない男が無難でいた状がとばれる和に秋がとばれる和
井			合	村
		والواد		50°-70
本		美	思	×

月

女

子

整切った悔い涼風に教えられ 終着の恐れを闇がのしかかる 終着の恐れを闇がのしかかる が燈をしおに患者は眼をさまし 病人へ上手になった二枚舌 ベッドからいたわりの声聞かされる ペッドからいたわりの声聞かされる ペッドからいたわりの声聞かされる 大阪市 類見せに帰る子があり夢があり タクシーの無線が流す土地なまり 見えずとも老母貫録の針の耳 千匹の鬼骨肉の血が迷う よく動く嫁が支えて来た家運 松江市 での鬼骨肉の血が迷う よく動り指のリング右手で信じてる は灯へうっかりゴキブリ逃げおくれ をすり指のリング右手で信じてる は灯へうっかりゴキブリ逃げおくれ をすめてから元の職場が他人めき 分譲地秋の夕日が傾いて 松江市 をかずまい 松江市 をかずまい 松江市	定刻に来たのが呼びに走らされ
恒 小 林 津	
松林	
可 孤 瑞 柳 A 五 枝 信	
紅	
施解いてさて本当に寝るとする ふるさとの段々畑で芋がやけ 秋風へ仮面脱ごうかなと思い 萩の花名さえ呼べない人を恋い 居酒屋の床机に年金坐り馴れ 年令の重味の笑いは美しい 等のとどく距離の甘さは母の味 問いかけまい精一杯の花だから 男対女たたかうなんて寂しいな ボランテァ青年二人涼しげに 履きよいのと替える旅館の下駄でさえ だどりついた椅子がはずんだ勇み足まっすぐに行くハンドルにある遊び 島根県	
堀 遠 中 宮	月
	原
江 山 村 西	灯
江 山 村 西 正 可 ゆ 弥 朗 住 を 生	所

市んだ			妻の目の届く広さを世界とす 手を出しただけで妻にはすぐ分り 手を出しただけで妻にはすぐ分り かけてみて年寄りの無駄を知り 妻の目の届く広さを世界とす
			I
			芳
		7070 B	子
放哉の果てを見下す寒霰渓 かれすぎて車間距離さえよう持たず 切れすぎて車間距離さえよう持たず 場取県 鈴 木 村諷子 が が が が が が が が が が が が が が が が が が が	雑感 泡に溶け	きて行くリズムに合わす薬選をて行くリズムに合わす薬選をて行くリズムに合わす薬選をでする。	情み重ねた努力の重は逃げませぬ 傷心の娘に無言の父が添い をえより早くエプロンかけて立ち 炎暑つづく敗戦三十三回忌 松原市 玉 置 重 人

2	山県白	しく老いたき筈が病み疲れ	涼の眠り足りたる視	駄の音しのばせて夜の	大阪市 西 出 一 栄	お帰えりが遅い編目をまた飛ばし	扇風機酷使されても労基なく	未亡人アウトラインにふと止まり	負かし	この暑さ老いの脳味噌枯れずいた	出雲市 原 独 仙	テトラポッドの無気力を打つ潮騒よ	いちば	を継	のない椅子にまた朝	心眼の曇りを恥じる空の彩	和歌山市 西 山 幸	底ぬけの阿呆が空気を和ませる	デパートにうちのブドーが売ってあり	民謡の本場でっかと初対面	余剰米少い秋をうれしがり
鰯雲両手ひろげて駈け出そう	ドライブインひとりが買えばみんな買い 男子 一夕 崩 ヲ	腹の虫などと日本人虫が好き	おがす	字する努力努力の字がな	安全週間旗のとおりに歩かされ	大和郡山市 森田 カズニ	思慕しきり烈しい雨の精かしら	尽きぬ愛うすいえにしの中で揺れ	月光をせめて浴びたい思慕の花	優しさを秘めた視線の痛い程	方程式解く倖せな鍵がない	和歌山市 松 原 寿 子	笑うたらわらい返されまた笑い	傷つけずつかずを願うている柳	過密にも広大無辺の天がある	ひっそりと生きて花の名など覚え	萩こぼれ秋の歩みを見て飽かず	和歌山市 若 宮 武 雄	神々の怒り火を吐くメラピーか	ボロブドール信仰はなき人のむれ (世界最大、最古の佛跡)	風葬の青春今さら何を追う

借りたい先にゃ貸せず銀行金だぶるスペッシャルコーナーの値札見たりせれる。	- に比べ安いと	大阪	風を見る長い手紙は父に逢う	ひょっとこになると冷めたい風が	旅に出る風は峠で振り向かず	風に逢い口笛吹いている金剛	紀元前金剛山は父である	富田立	人間の弱さ忘れた無神論	眼閉ず一人の私に戻りたく	ふがいない私に影が叛けない	さざ波の消えて湖底の抱く疑惑	悔い少し少しずつ湧く終列車	倉計	たわむれに夫と手を組む宗右衛門	還暦へ死線を越えし日を偲び	見える目がある幸せをまた忘れ	業を負う耳へ友情限りなく	夫婦かな聴えぬままで通じ合い	大阪	仕返しを考えている待ち呆け	泣き黒子しゃべり黒子もある女
るせぬ		市		吹く				林市						敷市	町					市		
0.7		大						板						藤						柳		
		坂						尾						原						原		
		形						岳						桜						静		
		水						人						Щ						香		
妻の役する人生のメロドラマ静座五分生きる力が沸く仏間		恥じらいの仕草にゆれる秋桜	けわし坂ばかりで詩にはしてくれず	ここで逢いここで別れた坂の秋	しぶ柿に想い出があり歯を入れる	富田林市	濁る世に母の笑顔は変らない	逆境へ振り廻されて来た強味	野仏を吹ば秋風丸うなる	嘘ひとつふたつは許す処世術	岡山県	湯の宿で若やぐ妻の侭になる	不器用に引込思案が輪をかける	集印の序にさっと拝んどき	退院一周年老妻とジュースで乾杯す	宝塚市	人並みな育ちも父母は心配し	嘘ついた夜は昔の夢を見る	機嫌よい孫はつぎつぎよう喋り	疎遠した友から定年来た便り	藤井寺市	サラ金をライバル視してくる銀行
	和					岩					嘉					傍					児	
	田					田					数					島					島	
	維久子					美代					千代香					静馬					与呂志	

原とい日は白いハンカチを持って出る 原とい日は白いハンカチを持って出る 原とい日は白いハンカチを持って出る 原とい日は白いハンカチを持って出る	藤 井 二 三 茶
ラー度泣けと 一度泣けと 一度泣けと	女性の厚化粧に似た油絵神のいたずら秋田新潟京出雲神のいたずら秋田新潟京出雲神のいたずら秋田新潟京出雲神のいたずら秋田新潟京出雲地んなであやしあやし孫の散髪皆んなであやしあやし孫の散髪皆んなであやしあやし孫の散髪若いのを貰うからいいさは負けおしみ真夜中の電話息子の酔うた声真夜中の電話息子の酔うた声直相とは不自由なものよ宮詣中内はクーラ広告ビラは冬の陣オルゴール開かねば啼けぬ業に泣きオルゴール開かねば啼けぬ業に泣きオルゴール開かねば啼けぬ業に泣きオルゴール開かねば啼けぬ業に泣き
小 高 江	若 弘
西 橋 城	林 津
雄 鬼 修	草柳

右

慶

史

焼

ħ

王だけは別だがアンチ巨人です 朝露へ草刈鎌にあるリズム
いわを
京都市 松 若社長のお守りもした生字引き 女の口からオーバーな形容詞
Л
杜
1

くり返すわたし好みの句を見つめ	島根県大	展示会まばらで素手で帰られずぶしさに息つく宵の虫しぐれ涼しさに息つく宵の虫しぐれっと呼んでいるよな声が未だ残り(孫帰る)	欲の無い眼へ演技などいらぬ 島根県 榊	陣痛へ女 女の手を添える祝盃へ耐えた涙は伏せておく	島根県 錦	0	満点をくれた姑とは遺書で知り 青春を語ればオレンジ色の月 変された証し人形のほつれ髪	四面楚歌頼みの妻もそっぱ向きられし泣き一度させてと母が言う姑の描く境界線を嫁は消し
	森		原		織		砂	端
	孝		秀		文		白	柳
	華		子		子		汀	子
この子さえなければ新聞種ならず済み	唐津市 新	お勝手になさいと妻に居直られり取って解らぬ事ばかり取って解らぬ事ばかり	優等生我が青春に悔があり 玉野市 小	たて前で終る会議が立派すぎあれほどにかくした癌を知ってた遺書振袖の値段一桁読み違え	宇帝市平	美しく老いたしメモは美容食雨乞ののりとの喉も乾干びて相好を崩して孫とは初対面にはじき西瓜に白いとこがあり	腹立も忘れて孫の寝顔だく 倉敷市 小門札を下して亡夫の三回忌	打水へ宵の花火が冴えてくる 単帰り惜しい日めくり暮れかかり ピンポンの会話がほしい旅帰り
	岡		谷		· 田		幡	
	回天		仙		実		里	みど

風

男

Щ

遺児抱いて恋の火種は伏せておく 鳥取県川崎秋女	j J	兵庫県 河 原 みのるかけがえのない人ですわとおだてられ最後の結果となった慌てよう見境もなく喋ったあとの味気なさ	一雫の涙を女武器にする 大阪市 河 井 庸 佑一雫の涙を女武器にする というで逃げ かんだだけでとんで逃げ	東早市 原 田 明 春 うつむいた心甘えているのかも うの先で生き空ら回りを重ね 頭の先で生き空ら回りを重ね	大阪市 天 正 千 梢 民宿によい娘がおって又来たし 標補者の顔は電柱へブラサガリ
太陽を紅く塗る日もあってよい 竹原市 時 広 一 路	「人」」を発	ロ 1 左 3	和歌山市 津 田 与 史神の庇護思う日神に近くいる 白旗に透けしたたかな顔がある 育す気の指花びらをなぞらえる	定退後みみず養殖とは佗し大正の因果嫁にも押えられ大正の因果嫁にも押えられ	いいでは、 いいでは、 いいでは、 いいでは、 には、 には、 には、 には、 には、 には、 には、 に

非常口教えて幹事腰をすえ 暴走を仕様か馬鹿な五十坂 六人目落ちてぼれが財を成し 朝漬けのうまさを知った老の旅 雑踏も妻の歩巾は共にある 胸の枕は 般若心経暗記仕様と思う日も 自信満 A定食で すてせりふにも 事の落ち着き 三女が孫産んだら旅に出る手筈 五十歳もう歳と言う甘ったれ 二人だけの指紋しか無い部屋がある 痛いとこつかれて茶化す老獪さ 公園のつつじの茂み黙ってる 水飢饉台風待ちと云う日本 あるだけの声で短命飾る蟬 オンザロックやっと心も溶けは コスモスの乱舞へ迷う蝶もいる に々太陽を背負ってる とかく貧相 吞舟の慨 みずからの道 すてがたき味 東大阪市 和 大阪市 愛媛県 守口市 泉市 斎 西 渡 野 字 藤 辺 呂 谷 三十四 洛 暁 徹 右 酔 童 舟 近 飲み代を払えば女将ふしぎがり 悲し おまつ 要領 鉄火巻目をつり上げて食う女 雨の日の便り手応えある中味 新しい茶碗で嫁と同居する 任されて嫁にとまどう台所 ふところに白旗を持つ強がりで 妻や子に充電されて出動す 絵にかけぬ景色へシャッター たて糸へ妻横糸で模様編み 桂馬とびも出来ず人生一直線 OLの小使をきく世帯人 初対面私も少し気取ってみ ビジネスの笑顔は別にもっている ル 掛けぬ過疎にのどかな空がある 、件費云わず手作りの稀少価 ら鮒へ退職息をふきかえし メット いとき笑える人で世に負けず 0 りのヒョコが育ちもて余す 悪い男が生き かぶり男の顔になる のとり 切っ 値 伊丹市 姫路市 呉 姫路市 堺 ておき 市 市 植 槙 樫 大 村 谷 原 橋 客遊子 寿 英 葉

香

詩

馬

曼珠沙華こころの火種より真っ赤	柏原市 大 峠 可	夢にさえ出て来ぬ亡夫のうらめしき	孫の鉢植芽が出た葉が出たさわぎよう	夕焼けて恵みの雨はまだ遠し	お米粒流してしもて気がとがめ	貝塚市 行 天 千	日傘さす姿絵になる京舞妓	しつけ糸切る喜びも女です	一人前に育てて親は邪魔にされ	明眸に偽りの色あり迷うまじ	倉敷市 藤 井 春	妻よりも娘に叱られるのが恐い	労働貴族ネクタイ締めてまわり椅子	無理をして横文字使い註をつけ	戻って来いすぎ去った日に悔があり	仙台市 川 村 映	一言のつまずき過ち戻らない	敬老日済めば途端に立たされる	ウインドから出せば左程の物でなし	会社では無口宗教ではうなり	大阪市 神 田 秀	ラブホテル下駄キッチリと揃えられ	適当に遊んで表向き真面目	唇をかんで鍵っ子まだ泣かず
	動					代					日					輝					峰			
群集の中で自分を忘れかけ	奈良県	要領の良さを時計に見破られ	しめたと思うポーカーフェースになってくる	されていると思えばにく	道風の蛙へ運がむきはじめ	寝屋川市	落し蓋亡母真伝の保存食	盛り合せいつ食べようか玉子巻き	命綱ここで切ったらなと思い	シブチンに花火大会腑に落ちず	米子市	十階に住んで指さす父母の家	老いた父の世話に明けくれ嫁がれず	恩人と呼ばれて疼く過去がある	背のチャック外せば乳房覗けそう	鳥取市	尺取は曲って方向考える	人物と言われて欠ける人間味	回転の早いあたまの空廻り	かまつかの燃えて還らぬ思慕を抱く	鳥取県	一つ欠き一つ充ちたり夫婦かな	蟻の群天下泰平など知らず	雲が風が光が希望を充たす
	松		てくる			江					増					大					林			
	田										田					塚								
	宇宙太										竹					豊					露			
																生					杖			

群集が持つと日の丸生き返り 群集の誰もが起爆装置もつ 群集の中の一人で貌がない Ш

兵庫県 北 Ш 越

老醜をかくすに笑顔たやさない

裏切の 直情径行妥協も早い父であり 円周を回るあきらめ切れぬ恋 汗は脇から流れ出し

1 畠 無 聖

電話 宝塚市

プロポーション線のリズムを絵にとどめ 栗ひろい民宿の庭にぎやかに がらにされた人生女悔い

ジーンズが晴着にかわるよい

大阪市 藤 頂留子

消されない文字にきびしいボ 食欲の秋に大根の価は三ケタ すすめられ万ざらでない若い とおろぎと般若心経誦す夜長

ールペン

大阪市

黒

真

砂

岩風呂へ私心をすてる湯を流 す

効きすぎるクーラー九月の暦立 風鈴も抵抗してる熱帯夜 0

いなりの

母の涙を見てしまい

音のする時計が好きな老いひとり 大阪市 本 間 満津子

作戦の兵になってる慰安会

島根県

飯

塚

虎

秋

年の功放っとく思いやりも知 自力即他力ですよと励まされ 自主性のない和顔愛語なら捨てる

運命に挑む小島の曲り松

年順と言われ

さびし

い床 柱

出来秋のぐち晩酌のほろ苦さ 正確に捉えた音を歳にされ

和歌山市

吉

野

富

7

破れ鍋夫婦で妻の主導権 締め切りへ当座入金帳走る

忘却へ綴る余生の傷の跡 マイホームとれから苦しい坂となる

久し 腹の虫まだおさまらぬひとり言 ぶり肩よせ合った迎え傘

竹原市

鈴

木

か

失恋が決意新たにさせた意地 前歴にふれまい反省した姿

どちらかが歩巾を合わす夫婦駒 桜井市 泂 合 茂

雄

分け合うた貧しさ恋し物は溢れて 盲にも役割がある児の躾け 知れず月はネオンの街をぬけ

寝屋川市

柴

H

恵美子

— 19 —

選に恩を着せ	選に恩を着せ	選に恩を着せ	選に恩を着せ	選に恩	F. 3	\$	E	J	Ē	長き夜をテレビ如きに支配されれり
の当り年 が異す 格奚盾 オ	姐 路计	姐 路计		り年	減反で今年は豆の当	笑	珠	III	宮	シャネル 五番恋の 気魄に耐らている
みつけ	みつけ	みつけ	72	時にいる時にいる。	本当のことを別れる時にいい生き方を追いつめられてふとみつけ抜けてくる風に彩あり裏長屋					たら殺し文句で弾みたいたら殺し文句で弾みたい
今治市 越 智 一	今治市 越	今治市				子	久	野	北	松原市
吐息の洩れぬようれてる人の文字	息の洩れぬようてる人の文字	息の洩れぬようてる人の文字	息の洩れぬようもあり人の世の	息の洩れるあり人の	ダイヤルを回し吐息の洩れぬよ音立てて崩れる日もあり人の世支えてる支えられてる人の文字					カウンターの女独りの怨み節腹の子を早くも味方にしてる妻堂々と正面突いてくる男
大東市 土 岐 トク子	土.		大東市							飼犬はちぎれんばかり尻尾ふる
後にくくる十七字の過保護へ反抗すねて伸び	る十七字	る十七字	る十七字	る十七字	音信の最後にくくる十七字ビニールの過保護へ反抗すねて伸び	生	野]1]	文	今日あたりちょっぴりあった秋の色姿は点少し男カ茶くたる
鳥取県清水一	鳥取県清	鳥取県			· 名 : の					よろこびを分かち合うのに居る子供マルチーヌの親を自慢にする雑種
2	頻	頻	叛	頻	雄ん鳥の自己主張	念	-	JII	文	空蛸は前世の命へすかりつき大阪市
岡山県 直 原 七面	岡山県直	岡山県		āī	こうごよさきの見					E 單は向けつ おへたがりつきみにくさは西瓜の皮の川の果て
への感謝状	への感謝状	への感謝状	への感謝状	家へ先に	気短かの笑顔は妻への感謝状			9		履歴書を書く手の皺の多かりしつきかつぎ汚れが裏目のユニホーム
く雲笑う土	く雲笑う土	く雲笑う土	く雲笑う土	く雲笑う	孫に聞かす民話泣く雲笑う土	美	勝		北	大阪市
岡山県 出 原 敬	出		岡山県							色即是空残とる余命は考えず
7構える	7構える	7構える	7構える	7構える	採血へ血管青く身構える					計算機に頼る人間育てる気
衝く結果	衝く結果	衝く結果	衝く結果	衝く結果	肝検査禁酒の嘘を衝く結果					横車押すには遠い席をとり

弾丸傷を誇れどヤング笑うのみ衝突をして居眠りがそれっきり炎天のそよとも吹かず原爆忌	7	母ちゃんのいびきだ人間味があるぞ妻は厳ししかしかよわい女なり	生るのかにカヨになってお名書で	るのがこが早こよったりつぐ民話にカセ人の日は子からの電	東大阪市	信念を少し曲げねばあす来ない妥協した涙へきょうを流しとく緊張を心電しかと見つけだし	親亀の子亀で新車輸送する鳥取市	昼寝の間にも余生が飛んで行く松籟を漉して風鈴の声とする神戸市	寸法の合わぬ形見を満ちて持ち 倖せの詩を作ってひとり者 和歌山市	両の手も足も震えてかずら橋
	森		那		竹		佐々木	仲		
	田一		須		中			بخ	芝	
	布		鎮		綾		静	ど ん た く	としよ	
	堂		彦		女		泉	<	ょ	
一生を島に委ねた聴診器	太陽が海に沈んだ海	一豊の妻になれよと娘に貢旗がない団地の朝の祝日よ	遺言ともつかず希望を伝えとく	合理化へ漬物桶が邪魔になり	今日の陽は昨日の	東チラチ	パパママに反発し	暗い影捨てた女が背負苦しみの汗は原爆の事	終着がわからないから老いも貯め終着がわからないから老いも貯め	
診器 岸和田市	の深さ	と娘に貢ぐ島根県	皇を伝えとく 京都市	5	の陽は昨日の悲しみなど知らず	ラチラ女心をためされる 良さあり老母の肌ざわり	反発しだした永久歯東大阪市	が背負い来ての壊れ蓋	の会議はお茶を飲んだだけがわからないから老いも貯めずる立場で罵声に耐えさされ	大阪市
き	の深さ	と娘に貢ぐ島根県西の祝日よ	牙者	j i	1	大 阪 市	しだした永久歯 東大阪市 崎	が背負い来て 物場の事にふれ	を飲んだだけ 米子市 佐	大阪市 横
芦和田市	の深さ	島根県	示者市	i I	1	をためされる 大阪市 神夏機	大阪市	が背負い来て必要れ蓋	 市	
岸和田市 島	の深さ	島根県 一	京者市	Z 1	神	大 阪 市	大阪市崎	が背負い来て 物物の事にふれ	市佐	横

人ことと思えぬ事故を見てしまり	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	はえ叩き時折り孫も叩かれる	責勿り未が宏し、念入樹 気にくわん事はとぼけて老の耳	岸和田市	留年を存ぜぬ祖母に迎えられ	脱線の一人おでん屋持て余し	心電図もしやと覗く線の幅	出雲市	人情の温みへ冷たい身をつつむ	うぬぼれて描く絵に色がのってこず	亡夫には済まぬぜいたく一人描く	鳥取市	核の舞う下で憲法九条論	医療車へ孤独は歩巾縮めてる	山峡で原色に生く老夫婦	倉敷市	事故現場涙にマイク遠慮せず	夫婦歴ピンチの後に身ごもれり	暑さには負けたがビールに強くなり	鳥取市	子を思う親は無口でいておれず	明日からは信じるまいと又思う	指切りげんまん明日を信じた子の瞼
	坪			清				高				有				斎				岸			
	田			野				橋				田				藤				本			
	冬			۲				可保				とし				通				無			
	花			う				休留				江				風				人			
その記算学・てくれる日を信し	バラを買う女心をさげすみぬ	悔恨の余白を妻の彩で塗る	是幾つど角さまようぶらちつ	明治生れにいやな言葉が多くなり	刀折れ矢も尽きうぬぼれだけ残り	吟行の寄せ書うれし病める床	ひがんまで 彼岸までと病みに耐え	今日もふと 仏のような人に会い		残り火のこの侭消えると思ってず	七十は七十なりに思いやり	追込みに掛る小説ホテルにて	決心を促す頭が前に出る	行き届く言葉であんじょう雁字がらめ		砂漠をさまようはぐれ蟻のあせり	石灯篭家系の長さを知っている	楽天家が来てじめじめが乾きそめ	風一陣饒舌な蟬を黙らせる	運鈍根ついに錦を着て戻り		目に角を立てて唾まで撒きちらし	見舞客見舞の品をみんな食べ
			Ш						若						菊						本		
			村						本						沢						田		
			好						多久志						小松園						恵二		
			郎						志						園						朗		

再会をしたのに女なぜ泣くか

ジー パンのやさしさ顔を向けて見る

線引きは机上でエゴが意志となる 試験管愛の言葉もテスト中 ヘルのカッコ忘我をぶっとばす

ああ五時かぞろぞろ ぞろぞろ退庁す

IF.

本 水

蟹の穴

月の光をためている

網張って蜘蛛は孤独なあしになる

星座まで夢の蛍は昇りきる

集まって鮮

川のぼる顔になる

貝を出た宿借が裸に見えてくる

緑 心之助

月光は黄金から白金へ告白

橘

高

薰

風

尼

恋瘠せの乳房から瘠せ来しという

合歓の花雨に濡れてるのは乳房

鯊を釣る鯊のごとくに群がりて

子と見れば月下美人は宇宙船

西

尾

栞

女もう密室にいる大胆さ

膝を抱く影恩師に似て長し もつれ合う影は襖の知らぬこと 限界の力を知った日のビデオ 拗ねている後姿にある自信

茶

14

伊

藤

111

を新年る号

私の

柳塔社同人総参加(一人一句)

旬

表された句 今年中に発

締切十一月二十五日着便まで

新紹

種は良いのに過激派の子が生まれ 裁判の末は和解で買われたり 寝間の句を思い出せないまま逃がし 口紅の濃さを加減して出かけ 三人の女一人はよく笑い ひきずった顔で汗するお人好し

浜

久米雄

緊張をほぐすジョー

クの軽い

腰

負け犬のあの眼ある日の自己主張 胸張って空気がうまい午前五 スケッチに牛のよだれが糸を引き

蒔

同 人介

吉

杉

浦

婦

美

子

多久志・薫風・ど女―推薦

田 笑

無鬼・薫風・~女―推薦 女

— 23 **—**

111 貞徳と芭蕉その弟子 柳 平 記 (6) 東

からである。

の織豊時代の戦国時代が終り、徳川の国家的の織豊時代の戦国時代が終り、徳川の国家的道」が存在していた。慶長五年(一六〇〇)道」が存在していた。慶長五年(一六〇〇)道」が存在していた。慶長五年(一六〇〇)道」が存在していた。慶長五年(一六〇〇)道」が存在していた。慶長五年(一六〇〇)道」が存在していた。慶長五年(一六〇〇)道」が存在していた。慶長五年(一六〇〇)道」が存在していた。慶長五年(一六〇〇)道」が存在した。

統一で、一応社会が安定すると、俳諧は再び

世に勃興し、いわゆる貞門・談林時代が現出世に勃興し、いわゆる貞門・談林時代が現出したわけだが、この時代に現れた松永貞徳の知紙伝受とか、伝綬秘書をふり回した。幽れ切紙伝受とか、伝綬秘書をふり回した。幽れ切紙伝受とか、伝綬秘書をふり回した。幽れ切紙伝受とか、伝綬秘書をふり回した。幽れ切紙伝受とか、伝綬秘書をふり回した。というに対している。

で、端なる知的遊戯に陥るしかなかった。 真徳は守武より宗鑑流志向だったが、その 真徳は守武より宗鑑流志向だったが、その 音をとり入れた「俳言」を重んじた。これこ 言をとり入れた「俳言」を重んじた。これて 言をとり入れた「俳言」を重んじた。これて 言をとり入れた「俳言」を重んじた。これて 言をとり入れた「俳言」を重んじた。これて される いながら、どうしようもないへぬるさで、端なる知的遊戯に陥るしかなかった。

をよく浮彫りにしている。

加えて彼は大きな誤りを犯した。和歌一連方式)を厳しくとり入れたことだ。この貞門方式)を厳しくとり入れたことだ。この貞門に対し談林がはげしく反発したのも道理といえる。芭蕉が「貞徳のよだれ」とこき下ろしたえる。芭蕉が「貞徳のよだれ」とこき下ろしたえる。芭蕉が「貞徳のよだれ」とこき下ろしたえる。芭蕉が「貞徳のよだれ」とこき下ろしたえる。芭蕉が「貞徳のよだれ」とこき下ろしたえる。芭蕉が「貞徳のよだれ」とこき下ろしたえる。芭蕉が「墳徳のよだれ」とこれでは、その世の同門の所為などもとよりあずたは、後の世の同門の所為などもとよりあずたり知らぬことであった。

という句まで残り、当時の俳諧師の経済生活日の花、茶、踊りの家元並みに、晩年は京都日の花、茶、踊りの家元並みに、晩年は京都日の花、茶、踊りの家元並みに、晩年は京都一排花手折る貞徳が富 正 平一挑花手折る貞徳が富

談林出身の芭蕉が貞徳をこき下ろしたひそ興する勢力によって末細りで消滅していく。世紀だが、談林との犬猿もただならぬ抗争の世紀だが、談林との犬猿もただならぬ抗争の世紀だが、談林との犬猿もただならぬ抗争の世紀だが、

とか、 んなこととは るが、生きていた芭蕉は、神ならぬ身で、 の身すぎ、世すぎの渡世の金びつにせんがた 去来・許六の「俳諧問答」では見事に解明し は、去来の「去来抄」や、土芳の 芭蕉没後に蕉翁秘伝の伝綬なるものを掲げた めに他ならぬ。 宗匠連の稼ぎの口は みにならい、貞門派を眼の仇にした蕉門 つくされている。それをいかにも勿体ぶって 「極意」を並べたてている。だがこんなこと 「極意」でふり回したのは、後の世の宗匠連 「正風・変凡」とかさまざまな俳諧の 一世無縁他生のものであった。 このことは次回に詳 「切字」とか 「三冊子」 「不易」だ しく述べ

けている ば悟り難し」 れば教えようがない」即ち「自然に知らざれ 生前の芭蕉はその直門の先達連中に対し俳 「当人自身が冷暖自知するものでなけ 0 境地だと晩年において結論で

稼業の所産だったという他はない。

蕉をないがしろにした、そのラチもない宗匠 今日の川柳が雑俳に堕ちたのは、実に俳聖芭

たちからも「何か」を得ていたといえる。 えながら、 活は、弟子たちに惜しみなく自らのものを与 芭蕉がこう語るなかでの俳諧師としての牛 そうすることによって直門の弟子

種

偉大なる巨匠の死後、

この蕉門の性格を感

彼が許六に話してきかせると、許六は言う。 何 こと大山の如し」 こと。あだに聞かんは無念の次第。 「鼠は舟をきしる曉」と付けた。このことを で呼ぶやらん」という前句に対し、 「さてさて、この曉の一字こそは得がたき 例をあげると、あるとき「人声の沖にて 動かざる 芭蕉は

はじめは、 どきはべりて愚老が満足限りなし。 許六の言葉に対し芭蕉はどう反応したか って作りかえたり」 に、前句に声の一字ありて音の意ならん、よ こういっているのがうぬぼれ屋の許六だか 「師起ち上りいわく。この曉の一字聞きと そのままうのみには出来かねるが、とに 「俳諧問答」にもこのくだりがあり、 須磨の鼠の舟きしる音―と案ぜ この句は 認め この

いう一定の秩序が必要となり、彼自身もこの りを示したが、こうなると蕉門内にも伝綬と かく、曉の一字を許六が大いに感心し、 6 てくれたことに満足し、 の門格を認めざるを得なかった節もある。 晩年の芭蕉は、弟子千人と称される高名ぶ 感謝したことは疑い

> 皮膜の虚実論(俳諧十論・享保四年刊) 解釈し、時にはあえて曲解し、 芭蕉の真意を離れ、 派を興した彼だが、 能して、 (一七三七~六七) 生涯俳諧の鬼と化したのが各務支考 である。 師の隻言片語を拡大し いつかその述作の傾向は 師の没後、美濃 彼 が 流の俳諧 理 7

念の中核を成した。

想のようだ。 離 とは、手法を写実を求めるなかにも、 松門左衛門の、 フィクションに相当するものを指している思 という思想に相通じたものだ。要するに俳諧 ところを要約すれば作品の構成上の この虚実の論旨は、 n た虚構の要素も必要だ、という今でいう 虎実皮膜 難解晦渋だが、 一重の間にあり 問題で近 究極 真実を 0

鼻祖に据えてもよろしかろうとさえ思う。 らする一句建ては、 ないというわけである。 をとり入れ、 に根拠をおき、 この理論は 和歌者流の雅語雅言は必要では 「俗談平語」を正すということ 俳諧は本来、 筆者にすれば 彼のこうした持論 民衆の俗語俗言 一応川柳 か

V 次回は 「宗匠渡世の哀歓

西

亮 勇

木

江 原

恒

諸

12

柳

引キ物に見あき長興山と出る

375

である。 て出す肴や菓子などを客が持って帰えるもの 「引キ物」は「引出物」で、 膳に添え

とは、 興では山と出たという倒置法的な作句だろう を持ってきた。それに見あきた。それほど長 秀吉の朝鮮出兵の際、降参軍が毎日引き物 「長興」は朝鮮全羅南屋長興郡の主呂 ひどい駄労解

「長興山」が全く不明

での小田原城主、稲葉一族の墓があり、稲葉 ので、これではないと思われる。ここには寛 青木―同じく「長興山と出る」が不明。 永九(一六三二)から貞享二(一六八五)ま (流抜二〇九米) があるが、知られていない 豊太閤の石垣山一夜城の向いに、長興山

> ……実は未だ参詣していない。 正勝の実母、 春日局の墓 (供養碑) がある。

はよく調べなさったが。 岡田―難句。礎稿、朝鮮の長興を引かれたの これはやはり青木氏のいう小田原・湯本間

夫。石垣山に一夜城を築いて、敵の度胆を抜 鼠、早急に攻め落として味方の兵を一人でも が降伏しない。秀吉も、敵はどうせ袋の中の 評定の名の通り、なかなか小田原城の北条方 湯島にあり、 戚関係にある徳川家康にまかせておけば大丈 死傷させるのはつまらぬ。交渉は北条家と因 して青木君と同様登ってみなかった。小田原 ろ石段を百段ほど登らねばならぬため、 説明があり知っていたが、春日局の墓は江戸 の長興山か。たしか「東海道名所図会」にも 高見の見物を決めこんでいたが退屈でか 古川柳に関係のないのと、 何し

₹

黄 字 柳

木 らい。それで、石垣山に相対する長興山へ登 り、或る日、一夜城や小田原などの景観を眺 洣 博 は、長興山登山と出るの意。 なわぬ。風呂に入るため湯本の温泉へゆくぐ めた……というのか思う。「長興山と出る」 木 甫

376 身をしる雨がいつか止ミ後家作り

取り。 西原 「身をしる雨」は『伊勢物語』の文句

止むは縁語。 いつか忘れて後家がめかしているの意。雨と を「身をしる雨」としゃれたもので、それも 夫がなくなって、その悲しみのため流す涙

拾二:11

むつかしい顔をして居る俄後家

2 とんだ後家はたかに成てぬり立る

鈴木一賞。 の中間でもある。 女のサガの哀れさを詠った句であ

その当座後家たて通しさうに見え

图田—旧 室山一同。 文句取としては洒落ている句 安四・信7

377 花かんざしをぬいて出る一ばん手

がある。浮世絵の新造にはたいてい美しい花 簪を描いてある。 如く簪磨き竹也」 然も普通ハ染紙也、葉同之、而して真の花の 稀とす。<中略>梅桜等の造り花粗製絹也 西原一「花かんざし」は「皆幼女の所用のみ /中略/。妓婦等も往々戯に差え者あれども (『守貞漫稿』) として図

有様である。 ましくトップにおどり出て、客をつかまえる 句は、女郎の客に対する制裁で、新造が勇

ある。私はこの句を禿としたい。 いるのは、私のみた範囲では新造でなく禿で 伏勢説に賛だが、花かんざしをさして 番手羽織をつかむ仲の町 礎稿と同じく「新造」とある。 『川柳吉原志』、「花かんざし」の頭 40

岡田

もちろん花かんざしは禿の髪かざりで

と夏すだれも考えられる。ふつうすだれに忌 378 室山一夏すだれ賛 中札をつけるから。 西原一玉菊燈籠よりも、 中の丁忌中の札のないばかり 忌中札のことを思う

入江―同。茶屋のつっぱった鬼簾 鬼すだれせふきハ見へぬ仲の町

五九 · 39

岡田一賞

三十二丁

と理解して、「心中であろう」と言ったのは この句の「心中」は、「情が厚い」「誠実」 の真実を相手に示す証拠という意味もある。 自殺することの意のほかに、相愛の男女がそ 鈴木―「心中」は、相愛の男女がいっしょに

入江一前同。 ことば。 ていったのである。 室山―芥川付近の者が、業平・高子を見かけ 男が女をおぶって 渡る 姿を 見 「心中であろう」はその

岡田

380

ぬか袋目口いぎやうに動かせる

性の美顔術を川柳的に諷したもの。いぎやう 意味で、こんな状景は現代でもある。 とは異形で普通でない形や姿。あやしい姿の 鈴木一とれはこれだけの句で、江戸時代の女

心中であらうと芥川で言イ

379

業平である。

てて口説いた、というのであろう。 い男だろう」と言って、高子の恋心をかきた 彼女に向い「どうだ私はこんなに誠実で情深 やっと芥川まで業平は高子をおぶっ来て、

くわくよくに備へ師匠の花見也

翼に鉄砲隊を配置。魚鱗と反対の隊形。 に、敵兵を中にとりこめようとする陣形。 鈴木―鶴翼とは、鶴が左右の翼を張ったよう 両

室山一賛。手習い(寺小屋)の、 くほこっている。 うで威風堂々として、 子さん達を従えて、さながら鶴翼の陣形のよ 句意は、お師匠様のお花見は数多くのお弟 その名声を晴れがまし

れてった教師の気苦労と同様、一人でも迷子 岡田―寺小屋師匠説に賛。小学生を遠足に連 執しない方がよいと思う。 う。両側へ教え子たちを並ばせて進む。

師匠であろ

西原一同。なれど寺小屋師匠に限定したり固

かぶ。 駈け出す。 が子供らは広い所へゆくと面白くてドンドン にしたりケガでをさせたら責任問題、ところ それを防止する師匠の姿が目に浮

大坂村小家

.

をうたった句がかなりありますが、それらの句が殆ど例外なしに心温まる佳句ばかりであ 品の底を一本に貫いている潔癖の精神の快さでした。初めの「足踏をすな」の章には子供 不二田さんの文章から共通して私どもにまでつたわって来る作者のお人柄の確かさ、全作 たのは、どの句にもほのぼのと漂っている豊かな人生の味、そして、中島さん、藤村さん 集だけに、佳句きわめて多く、それも楽しかったのですが、殊に共感を覚えさせられまし ることも、必ずしも例外ではないでありましょう。 このたびは古稀記念の御句集「谷町」を御恵投に与り、ありがたく頂きました。 薫風君が届けてくれましたその日のうちに、拝見しはじめると興趣とみに加わり、一気 男」のくだりまで読んでしまいました。さすがに長い御句歴のなかから選ばれた作品 衿元の汚れわたしが笑われる

河汚れ河童引っ越し考える

朝顔の咲くを知らない夜行性

うどんから比べコーヒーの馬鹿らしさ

村民后在夫

にしても、 特に心惹かれた御句を並べて行けばきりがありませんが、「雑(C)」からのこの四句 愉し 明治生れ い御本を贈って頂いてほんとうにありがとうございました。 の大阪人の一人である私には、思わずにやりとさせられた素晴らしい

も忘れがたい句の一つです。

大阪の路地は汚れた雨が降る

ルンペンの服からヒント得たモード

にも吹き出しました。

洗面器の向うへピョイと蛙逃げそれから、私が感心した句に、

があります。作者はこの新味溢れる状況をどこからキャッチされたか、それにも興味を

覚えましたが、南区竹屋町で少年時代を送った私が、「谷町」という御句集の題名から、

路まで行き、線路脇の草むらで蛙を何匹か捕えて戻ったことがあったことです。 を、三、四人の学友たちと、空堀を東へ東へと子供にしては相当に遠出して、 その聠想ではからずも思い出したのは、道仁小学校の四、五年生の頃、 きた蛙との関係はどうなっているのでしょうか。 には桃谷から玉造あたりへ行けば蛙がまだ見つかりましたが、今日の大阪の子供たちと生 理科の実験用の蛙 城東線の 六十年前 線

時節外れの旧句一句

層の御自愛をお祈りいたします。

敬具

初午の絵行燈を君知るや



古本商 長 野 文 庫

元運送業

出

原

敬

歩い 満 福 何 4 勿れ主義貸 ち干きが 0 神来 て行こう走 かも半端 61 よと朝 ある のままで年をとり Û もせ れば息 Ö で 0 ず 雑 戸を開 借りもせず が切れるから 魚 ば 日 け R る 楽

風の吹くままに 評判の真面目男なのですが、実際は大違い 勉な働らき手」 ながら不義理を重ねている始末です。 きで済むことでも仲々済まさないで気に きている実に頼りない生活をしています。 生涯でありま そんな訳で私の く笹小舟同様、 ささやかな古本屋を続けて来たのがは朝毎晩自らの手で戸を開け閉めて五 き手どころか、 がありませんが、川柳塔に載っ と見ているようで、 句にはあんまり「はたらく 世間 不特定多数の客に媚びて 水の流れるままに、 大の怠け者で一 の目では まことに 枚のは 町 た右の 従い 内でも 私の なり 7 7 から 生 勒

句がはたらく詩のつもりです。

先付け やりくりの 引合わ 夫よりも 本社から 80 0 来た技 荷 肩 小切手を賞受くように受け 妻は が出 書多き妻多忙 原 る 術 朝 価 屋 0 0 0 機 空をほ が 微にふれ 過 8 き

いられる 子で酌みながら時を過ごすの います 川柳に興 遠い進歩のない拙句を冥土からご覧に 水白柳様に 療養の頃、 していましたが、 ました。 「此奴はあかんな」 浅学非才の であるながら時を過ごすのを唯一の楽しみはに興味を持っていますので川柳を肴に父一味に明暮れの日々ですが警察官の愚息も トラックに木材を積載中腰椎を痛めて 中 事と思います。 終戦後少年警察官を拝命通信書記を・は爆装の戦闘機と起居を共にしてい お会いし 服部十九平師からご指導を受け清 悲し 3 家業の運送屋を手伝うため と両先生お嘆きに to 入間 のもその頃と記憶して 生活は愚妻に 冶 0 詩 になって 任 世 道

唇をかんで鍵っ子まだ泣かず



スト妥結うな丼の味かみしめる 会社員 植 村 客遊子

鏡 嫁貰ろて安定をした仕事ぶり 元気よくいかな などいらぬ暮しで強く生き と焼酎酌いでくれ

やで、 教えて下さる。 るのだから致し方がない)客さん今日は京都 とは万的さんに失礼だが我社共ガード下にあ ビジネス街にある社に来られた。(ガード下 今年の春から万的さんが大阪北のガード 今日は天王寺…と白溪子さんが句会を

ある。 7 までに数だけ揃えねばならない。えらい事で ら仕事どころではない、兼題を聞いて退社時白溪子さんは私の上司だ。この声を聞いた 一楽しい。いい職場だと思う。 相対している。表より裏を見ている方が目 なった新しい呼び名である。表玄関はヤン ここ大阪北区角田町四ノ二〇とは今般改正 ディゼル本社、 裏は梅田コマ劇場楽屋口

> という制約があったとしても、余りにも少な 今更愕然とする。 い、否ゼロといってよい「はたらくうた」に 歴の短かさと「一度活字になったもの

誰のためにでもなくする残

のうた」となってしまうからだろう。 らしのためで、「はたらくうた」即「暮らし 考えて見れば吾々ごときは働くことは全て暮

人間を詩い、いのちある句を作るにしては余 栄光を捨てた挽馬の眼がきれ 61

りに情けない働きばかりであるからだろう。

標準の暮らしに飽きて来た男

魔法で稼ぎ凡愚な暮らし向き

構のくらしに浸るか。

せめてもの桁外れの生活を夢みて、しばし虚

がやっぱり寂しいものとなる。

裏風の淋しさを知る小商人

というのもつまるところ、 花巡る蜂にも蜜というノルマ。

働きよい職場はないだろう。 上司の白溪子さんが川柳家だから、

これ ほ

> 樫 谷 寿 馬



0 教 わ か 員 る人にされ 111 輪

印鑑 合槌 言うこと すず 上を信じ は打 け がば話 0 が て意 人間 な 61 見 信 0 は別 U で笑って済ましとき 7 ず に 持 ち

真

6

中

で

視

線

が

もつれている会議

問題についてはここ五六年何も起こっておらる。夏休み等は特に神経を使う。幸い非行のいる。おかげでこちらは会議会議の連続であ いる。おかげでこちらは会議会議のま行化等々大きな問題が山積、最近よく言われている学力低下の問 を抜くことは出来ない。 ず父兄や各中学校から高く評価され は仲々キ る。 そもそも女ばかりというの 、それに女の子ば学校の先生は休え 大切な生徒を預かっている以上 元につきる職業はないのであろうが現実なるほど他人の目から見ればこれほど ビシイものである。 休みが多くてうらやま ばかりで……とよく言わるが多くてうらやましいナ それだけに から 厄 介 卒業 何 7 2 一業時の気はいる されて あ

> 作業 筋書 軀 服 目 0 出 0 芸 勤 油 0 ま 停 L カ た 臭 年 か出 間 働 ナ赤 五 に (1 来 月 合うた 7 61 0 80 < 陽 る自 猿 赤く燃え 日の がまぶい で (1 信 る 1 ル

津

 \mathbb{H}

与

史

老

住友金属和歌 うも 0 17 Ŧi. 12 III 句で ので のは殆どない。 柳界に入った時がすでに六十才を過ぎて ある。 私にとって働くもののうた……とい 歌山製鉄所に転 鉄 道 無理に探し を振 り出 職、 その 出し U 後 たのがこ 専ら 労

坂を登り始めたところだがもう昔日の情熱が四月、お声がかかり第三の人生のなだらかなら三年程無職時代を過したが幸か不幸か今年ふらふら、四十九年十二月心臓をやられてか ったが意に副わず傍系会社や下請業者の 働運動に専念、 のが本音である。 停年後は 地方議員の声も 間をかか

料理する事おろそかに

になる独

9

奇しきさだめ八人の親を見送る



もう一つの楽しみは、六十歳から主人と川柳

よかったと思っています。

て呼んでくれるのが今の楽しみの一つです。の教え子達が時々、クラス会をしては案内し

若い頃十年程教員をした事があり、

其の時

夫や子の為にする家事張りがあり 教え子も六十近く皺目立つ 元教員 竹 中 綾 女

今年一月五日夜、思いもかけなかった主人 (肖二)の急逝にあい、死とは本当にあっけないものだと、しみじみ感じました。 文の後妻二人、養父母、肖二の両親、計八人 の親を見送った私ですが、やはり夫の死は一 番こたえました。何をするにも、空虚な毎日 を送っています。

> 妥協 労働 生活の溜 61 筋 た汗 の道 L 0 て 汗 の向うの秋深む L 80 何 太 か描 息 か 陽 政 足 に りな 似 け 府 ず汗を拭 から 7 い世に 眩 貰い L 並ぶ <

会社員

大

峠

口

動

昭和42年の闘病生活の頃、まったくの独学昭和42年の闘病生活の頃、まったくの独学がら、細やかな自衛手段を講じるほかない庶がら、細やかな自衛手段を講じるほかない庶がら、細やかな自衛手段を講じるほかない庶民の姿を、現代日本人的感覚に綴れたらと思民の姿を、現代日本人的感覚に綴れたらと思民の姿を、現代日本人的感覚に綴れたらと思民の姿を、現代日本人的感覚に綴れたらと思民の姿を、現代日本人的感覚に綴れたらと思いないます。幸にして私には、過ぎた詩友のもないます。幸にして私には、過ぎた詩友のもないます。

正本水客選

大阪市

岩

井

公

平

リコン長ぎュンで売びられ 湯けむりの中に声して谿湯壷 掛行灯の絵も秋草の秋思祭

エスカレーターおりねばならぬ順が来る前山の緑溶かして湯があふれ

拾われるようにパートのバスを待ち 愛媛県ご野の道まつすぐに昼の月 愛媛県

宮

尾

みのり

子に賭ける夢を他人は欲と言う
贅沢なひととき雲と対話する
かけ落ちの果てと思えぬほど憎み
かけ落ちの果てと思えぬほど憎み

矢 野 佳 雲

今治市

綺羅飾る孔雀うしろを覗かれるとびはねる時が卵にほしかつた

子の仕置き納戸へ錠は掛けてない欲のないリズムで母の台所

殉死した顔か埴輪の目が笑い

柏原市

小

谷

葉

子

花の散る速度で心変りする仲の良い女 二人のかくし味

持ち味を生かした別れとはならず

枯葉ちる散る中年 真只中心にもない許し乞う速達出しに行く

別れの日言葉はむごい方がいい

断崖に立てば答えが聞けそうで悲しいかな大きい方へ手がのびる蟻ころす心の痛みはあるのだが

来客も減塩食でもてなされ。高槻市

竹

内

花代子

三重県川上富子

禅の宿やっぱり寝られぬ人もいる中学生大人と子供が同居する	出雲市 園	風速へ素直にゆれる竹が好き	ライバルの友といるのに楽しくて	子と対話結局金をせびられる	転んだら東京僕は踏まれそう	鈍感か多忙か虹へ振り向かず	今治市 渡	悪友がひょっこり時効の顔で来る	人生におまけの欲しい籤をひく	法律をするりと抜けた隠し芸	コンパクト開けて女は騙し合う	トースターポンと跳ねてる朝の顔	鳥取県 和	送り出す母振り返り笑顔する	京にいて京の土鈴を買いあさり	秋の空ゆかたにしたい色で澄み	糊効いたゆかたへ母の背が伸び	秋風が吹けば黒さが目立つ腕	京都市 松	定年へ負けまいとする老の指	一と駅で降りる私へ冷房車	弓張りの月が浮いてる手水鉢	チャンネル権今日は私ひとりいる
	Ш						辺						井]1]				
	多						南						観						芳				
	多賀子						奉						洋						子				
養老院に来ても家柄自慢にし妻の留守二本目のビール軽く空き	日々好日子供の齢を忘れかけ	倉敷市 中 津	母のないことが世間を小さくする	末席にはべり冷房ききすぎる	雑魚でよし無心に泳ぐ水がある	産着裁つ鋏の鈴がよくはずむ	隅つこに立てば歪んだ影が落ち	兵庫県 辻	点滴の音泌み込ますあばら骨	ひとときを病室の窓開け放つ	病状をジョークの皿に載せてゆく	病室の前で仮面を付け替える	ブランコの確かに揺れている九月	伊勢市 山 本	コンタクトレンズしたまま眼の検査	踊りの輪橋の上にも飛火して	待ち人は来らず雨は降り止まず	桜餅盛つて木の鉢木の小皿	盛り砂に鍬チョイチョイと地鎮祭	岸和田市 池 田	石垣のつぎ目雑草よく見付け	平凡な朝で味噌汁の湯気を吸う	惑い持つ女の性の土用波

光

男

香珠夫

文

平

めでたい日音痴の母も手をたたき設計は出来たが貯蓄ついて来ず	岡山市	四人目を気兼ねそうに生む若さ	糖尿がまんじゆうこわくさせている	優勝旗砂の重みを持ち帰る	三輪車ひかり号だと出すスピード	寝屋川市 粒	意見吐くだけの役所のプロジェクト	香水に縁なく妻の台所	食べ飽きたぶんを吊り柿にする	三十の峠でいまだ母の傘	岡山市	今日母のピンチ仏間の灯が消えず	主義主張ないのが共鳴する恐さ	指定席恋の外堀なら埋める	鳥でも飛べば童話になる西日	鳥取県加	今回は警告だけと若いポリ	同窓会喋り疲れて妻帰り	やっと坐るテレビにもう妻の居ねむり	哀歓にコップの底の氷鳴る	岡山市 井	老人のミスは呆けたで許される	背番号つけて台風やつて来る
	原四					稲葉					海納					藤					上		
	田																				一柳		
	凡太郎					好子					百川					茶人					五郎		
負け犬の月に向って吠えてみせ悪女にもやつばりなれず髪洗う		核家族稲刈りにゆく打ち合せ	籾袋積めば地虫の声が止み	薄化	古稀にしてなお草市の荷拵え		乱雑に靴脱ぎすてて帰省の子	太い腹出てきた程は貯めてない	スタミナを配分定年待つばかり	万歩計ゼロに戻してさあ朝だ		真正面からでは悪の顔でなし	大輪のひまわりこれはこぼれ種	シャツターが降りてる煙草屋も	磁力にも似て反挠の愛なりし		涙腺の弱い女の懺悔録	露草は宇治十帖の彩で咲き	熱帯夜打水昔の風を呼ぶ	感触が未だ手に残る石礫		捨てに出た筈の孤独を持ち帰り	公園のベンチで連れが欲しくなり
せう								۷.	')				11年	H							Ψn	-	5
せう	島根県					島根県		۷,	9		大阪市		131	日曜		鳥取市					和歌山市		り
せう	島根県 松					島根県角		۷.	9		大阪市 白		任	日		鳥取市 中					和歌山市 浦		9
せう	県					県		ν.	9		市		任主	日							ф		り
せう	県松					県		ν.	9		市白		任主	日		中					市浦		9

薄幸の女小さく座ってる	親が居る世話をやくなと祖父の弁	唐津市 三 浦 ひろ坊	啄木の歌も借りたい日記帳	僕が吹くラッパの中へ妻の耳	空想の恋文ならばまだ書ける	僕の手が喝采の導火線	富田林市 中 村 優	栄転の後釜左遷がくるコース	角とれて黙りこくった石の性	切れ切れの運つくろうて夫婦坂	楽しければいい青春と言うでなし	旭川市 朝 倉 大 柏	シャンデリア男が嘘を買いにくる	アクセルを変なところで踏む女	我が人生透かして見ると穴だらけ	更生の一歩尖った石を踏み	松江市 梅 本 登美也	聴診器酒と煙草に罪をきせ	金使い荒いところが僕に似る	人生を一人で生きたような口	匿名でないと正論面映く	海南市 牛 尾 緑 楼	鍵かけた小箱を胸に持つ不幸	ずるいと思う人も自分も生きている
耳遠く長生きしますと褒められて	孫画いたクレオンの馬馬に見え		軽口へ自衛の線は引いている	カセットのお経和尚にすすめられ	年金を飼い殺しとも思う日も	電話番号その中住所教えます		旅先であらためて知る子の躾	信頼をなくしてからの重い口	不信感話せば話すほどつのり	旅先で親娘の会話きりがなし		真相を知る友話題を変えて呉れ	悪友になって打算の矢をつがえ	反応をみたい噂を風に乗せ	幸せの汗が教える風の味		今日も無事亡夫に告げる癖がつき	残り火は夢の中で燃やしとこ	世話好きの友病室のボスにされ	炎天に真赤なカンナの自尊心	144	長いトンネル抜けて終着駅が見え	悪女ぶる女ひとりでもてている
		豊中市		40			尼崎市					長崎県					岡山市	U				岸和田市	7.	
		田					中					岩					花					古		
		中					塚					崎					田					野		
		善四郎					喜甲					和子					たけ志					ひで		

札束の高さで背伸び手が届き 湯治場に秋が来ている祭笛 盛装した今日は言葉も化粧する 化粧して恋の台詞を考える 半生は夢にしておく行状記 千鳥あし電話のしたい人が居て 旅つづくスタミナの欲しオロナミンC 旅の宿持病へ忍の夜を座す 樹の間縫い香良の滝に夏惜しむ 松喰い虫山の風情をかえて行く 枯松のあちこち見えて山淋し 知らぬ人に会釈をされて一寸てれ 西日なか主婦のスタミナ長話 無趣味のあげく寺参り神参り 降りる時分に冷房利いてくる 大花火句を書き留めている間にも 空蟬をたちまち蟻の運び去る 刈りが終って案山子横になり III 柵温泉にて 秋風そよと遊んでる 寝屋川 熊本市 長崎市 広島市 兵庫県 市 有 光 JII 1 井 働 井 崎 林 芳 美保子 鯛牙子 白 仙 車 先走る人気脇役に助けられ 適量に飲んだ所へ友が来る それぞれの訛で孫がやつて来る おたやんと言つたら怒る娘に育 訂正印押して出直し出来るなら 古里の母の香がする栗が着き 相槌を打つた方へ罪を着せ 心にもないいたわりで傷を究く 風鈴も寒さに負けた音になり 疑うを知らない妻で物足らず ご近所のニュース肴に妻の酌 叱られるうちが花だと酌いでくれ 父さんが課長の会社たかが知 目を瞑りや 輸入する国と思えぬ捨ッぷり 田舎駅社宅の鶏の声のどか 御近所運恵まれてますと娘の便り 家だけで威張れる父に酌いであげ 借金とくんずほぐれつ五十年 失言をした大臣の方に やはり昔はよかつたな つき れ ち 大和高田市 岡山市 尼崎市 呉 島根県 市 清 岸 木 玉 中 水 本 木 村 谷 金太郎 豊平次 利

美

晩酌のもう一本はどの指で	島根県	バス賃に足らぬ還付税の再通知	なめくじを挟む割箸二度のつとめ	溶け込んでみたいと思う空の青	大阪市	盆踊り街から助人やつて来る	盆過ぎて帰れば故郷寂みしくて	敬老の日に来たことが気に障わり	川西市	一番に喜ぶ人に燈をあげる	弱肉強食あるとは見えぬ虫の声	タレントがもみくちやにする日本語	藤井寺市	銭の音他人の音でも気にかかる	初恋の人に皺などえがかれぬ	電話口俺だと息子大人ぶる	出雲市	塩ふいたジーパンで街を悪びれず	一息に干したコップの恥ずかしさ	頂点へ立つまでの汗信じよう	和歌山市	苦労した過去は語らぬ父であり	捨てる神とも知らないで手を合せ	肩書が出来て歩巾が広くなり
	佐				欄				氏				中				板				福			
	々木				37775				林				原				垣				本			
									洋				比				夢				英			
	裕				蘭				敏				比呂志				酔				子			
岩に立つ鹿の瞳が濡れていた	コーヒー飲みに行こうよメダカみたいに	今治市	久し振り空気が旨い退院日	母の声聞きたく或る日墓に佇ち	とぼれ種とぼれたところで芽を伸ばし	諫早市	折角の書院造りにゴミを溜め	一太刀を浴びて硬骨受けて立ち	饒舌が聞けない二日 妻の留守	羽咋市	嘘も方便白旗を揚げてみる	欺かれ騙され女蝶になり	わき役がひよっと主役のセリフ言う	竹原市	片面を見せてもらえた使節団	パスポート赤にかえ紋残し	入道雲の青い空大阪の盆休み	大阪市	城もまだ建てずに句集出す	のど仏突き出し仰ぐ揚雲雀	今年また墓参も出来ず海苔送る	松江市	住民票長女の夫と記入され	電算機もっともらしいカタカナで
		園				江				Ξ				古				新				黒		
		部				副				宅				谷				Ш				目		
		Æ				\equiv				ろ				節				貞				大		

亭

牛

則

夫

祐

鳥

片町線車内で虫が鳴いている ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	叱咤する父の声かと聞く霧笛左遷して三点セットに腹を立ていつ見ても妻の寝顔は疲れてる	年の差を他人ばかりが気にかける寡婦三年四角い文字にふと気づき悔いのない一日にする陽を拝む	草原の雷雨名曲どおり霽れ ・ 欧州旅行 ・ 欧州旅行 ・ の出る。 ・ の用で生れも言えて隠居せず ・ の用で生れも言えて隠居でする ・ の用で生れも言えて隠居せず ・ の用で生れも言えて隠居せず ・ の用で生れも言えて隠居せず ・ の用で生れも言えて隠居せず ・ の用で生れも言えて隠居せず ・ の用で生れも言えて隠居せず ・ の用で生れるこれははない。 ・ の用で生れるこれはない。 ・ の用で生れるこれはない。 ・ の用で生れるこれはない。 ・ の用で生れるこれはない。 ・ の用ではないるこれはない。 ・ の用ではないるこれはないるこれはない。 ・ の用ではないるこればないるこれはないるこ	去に	燈台の緑の光りやさしい灯
育 岡山県 市	京 属	八尾市		町 田 市	総 社 市
二	渡	田		竹	水
宗 □	辺	中		内	子
吟	伊津志	紀美代		紫錆	つるえ
要の風当り強くてまだ無口をの風当り強くてまだ無口をない虫が鳴きはじめまる。 東広島市 関外でない妻でした五十年 東広島市 東広島市 東広島市 東広島市 東広島市 東広島市 東広島市 東広島市	日手紙を	日は二度ないわたしの中いたいとと言わしておこびんを座右に男にある安	出る杭は打たれる程に出てみたい寝返りをうてば女房と顔が合い	御詠歌の流れる故郷の盆休みっているがあります。 はいい はい	子や孫が集いお盆の夜を更かし
石	池	す	満	高	砂
井	田	から	仲	崎	田
さわ					

島松県	よく揉める地球と俺もそう思う	弱点を隠して女斜に構え	美しく老いても女姦しい	東大阪市	眉一つ動いて今宵勝負する	流れ雲の影が私の影を消し	日記帖開けば嘘も強がりも	名古屋市	湖に沈む月を擽ぐる虫の声	近道が男盛りを裏目にし	軍歌出て老兵水を得る酒席	羽曳野市	関心は人一倍でうわさ蒔く	聞きなれぬ声に思わず耳を立て	つて個性死		懐中に辞表あの頃なつかしい	詩心は無いが秋バラと話し合い	は	青森県	誘う月誘われるままペダル踏む	もたされた顔です笑みを絶やすまい	最善をつくして残る悔もある	唐津市
岩	i			萩				越				麻				田				波				岩
Ħ				尾				村				野				中								崎
Ξ				真				枯				网				紫				たい				
和	I			真佐志				梢				玄				浪				ただお				實
立ち飲みのビールに淡い人生観		ワンマンの自負相槌打たせない	鍵穴の向うに不思議などはない	トップの座落伍してから失語症		友と言う気軽さに有る重み	完璧な嘘へ秋風吹いてくる	折鶴と父が対話の太い指		郷愁を誘つて夕焼ビルを染め	化粧する女鏡に穴を明け	夏祭り汗を我慢の浴衣着る		ほらほらどこも綺麗に見える島	責任のない位置に居る自重	明細は忘れたままでよい出費	Ŧn	新聞屋覗き穴から断られ	宅配は預けられたり預けたり	聴診器から働きすぎを叱られる		腰巻きの巾ほどあれば旗になる	本人は沈んで波紋知らぬまま	お母さんわたし真ん中お父さん
	大阪市				呉市				岡山県				大阪市				和歌山市				大阪市			
	藤				Ш				柳				溝				坂				本			
	森				根				原				淵								多			
	小雅子				喜代美				孝				美紀子				公				俊			
	子				美				柳				子				子				子			

日向ぼと猫に欠伸をうつれさる手花火に麗人の貌なお白く	1	く今年の抱負が未だ残り	名刺には無かつた肩書持つて来る	挨拶の後で種火を付けんとす		父に似ずふっと淋しさある安堵	偽りの涙優しい人にされ	勝気な娘本心日記だけに言う		不自由な身で時に指示する老妻でよし	叱られた味が時を経てわかり	推敲が軋む夜窓へ月が射し		俺ばかり不運と自分で決めている	失敗の云い訳をまず準備して	円高が俺の暮しにどうひびく		山寺の鐘が朝靄ぬうて来る	玉の汗かいて麦茶を熱く飲み	夕日背に尼僧の声と蟬の声		天下り釣もゴルフもできる椅子	酔つている彼の話を酔つてきき
A 列 T	會 數市				岡山県				札幌市	よし			岡山市				新潟県				出雲市		
r	þ				岩				北				串				高				高		
E					道				村				田				野				見		
¥	E				博				深				句味				不				鐘		
2	F				友				星				地				=				堂		
塔にささつて蒼く月冴える、入れの整理結局みな残り	パーセントで計算されるダムの水		支援したかい無くビールビールだよ	立話籠の中味を覗きあい	消毒がすめばトンボが田に乱舞		一泊の友情旅行文続く	出稼ぎの日焼の顔で父帰る	溢れ出る石油が何処か出ないかな		自問すれば良しと良心云つてくれ	競いたい心の白さのコンクール	筋書きのないドラマで甲子園が好き		ささやかな夢は晴耕雨読だけ	競争のつもりで無いが休まれず	課長にも下げる頭をボクに下げ		珍客にされて保険が切り出せず	朝顔の竹へ闖入したヘチマ	妻の留守男一匹飯を炊き		愛情の落差愚かにパフ叩く
		唐津市	よ			熊野市				倉吉市			3	八戸市				橿原市				東予市	
		桧				西				田				島				西				小	
		垣				久保				民				田				本				Щ	
		岩				苔				碧				昭				保				悠	
		光				石				水				治				夫				泉	

泉佐野市 大 工	射程距離そっと引金引いたろか	晩成を妻はとっくに諦らめて	兵庫県 野々口	換気扇今日の献立て運び来る	浴衣着てママにだかれる盆踊り	富田林市 奥 井	黒猫であるため鈴をつけておく	妻の肩揉んで痩せたを云わずおく	親方になれば力士もよくしやべり	吹田市 藤 原	抱いた児が眠つて母のいとまごい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	洗面器溢れるでっかい夢を見た	温室で咲かせぬ菊が欠伸する	名古屋市 大 林	どの指を切つても痛む親の慈悲	身綺麗で和服の似合う母が好き	よく笑う嫁と姑が居て平和	倉吉市 野 中	父の目に娘の花嫁姿がまぶしくて	出る釘は打たしてもらうと云う社訓	マネキンの水着横目に肥満体	熊本市 北 川	
静			木綿			春				世史春				曲ん手				御				_	
子			也			子				春				手				前				進	
フイクションですと断つてドラマ済み	紫煙の輪煙草嫌いもつい見とれ	*	冷房の水滴垂るは嫁の部屋	末成りの瓢簞なればなお愛し	য়য়	ふるさとに家と祭りがあるゆとり	恥を知る狼だからペン鈍る	+	赤トンボ走る法衣について行く	初盆の夫と三日過ごしけり	掛	方言を一しよに盛った皿の味	主義主張曲げた話で角がたつ	4	流行の侍商法ひどすぎる	ナンバキビかじりまだまだ嫁取らず	寝見	晩成型丸刈にして几帳面	大欠伸していい身分羨まれ	惠	教材のあとアースまいて蟻散らす	関節を曲げて品よくおじぎ草	
3		大阪市			羽島市			大阪市			唐津市			出雲市			寝屋川市			青森県			
		平			伊			品			田			園			福			五十嵐			
		井			藤			Ш						Щ			富						
		露			静			Œ			虹						隆			操			

芳 枝 次 汀 栄 子 史

				段どりも主役も男やもめなり						帰るなりお母ちゃんはと皆が聞く
				建売のようには売れぬ娘が残り	江	近	橋	高	兵庫県	
				値札読み合つて夫婦の目が笑い						炎天をさけて朝の畑仕事
				逆点打雑魚はやたらと血をもやし						年寄りのおしどり夫婦で句を作る
10.00	鳞	JII	市	岐阜市	雪	峰	根	Щ	島根県	
				横町にあるから詣る稲荷さん						シベリヤのノルマ思い出遠くなり
				秋盛りテレビをきると虫の声						通夜の庭満月へ盆栽が並ぶ
				勝負師にもしもの裏目あるものか	嵌		置	玉	唐津市	
				山を切り山を隠してビルそびゆ						拙なさに騙されておこう妻の嘘
11000	暁	沢	米	大洲市						泥んこの子供子供のド真ん中
				そば談義聞いて信濃のとろろそば	#			辻	新宮市	
				志摩の旅どこもさかなのうまい宿				8		退社時は自転車が抜く自家用車
				バタフライ溺れる寸前とは違う						マイカーも続く牛車の田舎みち
				母の肩持つ妻になり世帯馴れ	竜	朴	井	筒	唐津市	
- 50	可	木	鈴	名古屋市						海閉じた砂の感触を我愛す
				へそくりへ開き直つて妻強し					ン	祭り太鼓打ちたいばっかりUター
				意地をはる児だとかあさんせつながり	-	勝	下	Ш	唐津市	
				嫁ぐ娘と母と今夜も夜を更し						年を知る年金振込み予約され
				おとなりを引合いに出す町会費						マリはずむごとに赤子の目が動き
				目礼をかえしどこかで会つた人	子	千	辻	中	大阪市	
25000	吞	子	金	上田市						朝風に新聞少女の太い股
				*						スズ虫よ雄を食うのは止めてくれ
				頼られる苦も倖せのうちと知る	治	掬	原	桑	唐津市	

香

風

明

魚

同 人 吟



前月号からー

1 松 園

17

捨て場所がないポケットの石一つ

考えさせる面を持っていると言いたい。 ろう、人間追求が川柳性の一つならこの句も 斯んな人達ばかりなら世の中も大分変るだ 秋の風犬もあしたを考える

めて重く伸掛ってくる巧手を見る。 犬も況んや人間に於いてはだろう、軽く纒 遊

炎天をゆっくり歩く罪を持つ

らぬ歩み殊に女のそれは余計に哀れだと思う 神仏に遠く居る日の生ビール 焼き附ける炎天下を罪を負う者の歩みにな

弱い人間の果敢ない粉飾の姿だ。 のでそれだけ恐れて居ることだろう、所詮は 遠く居るとは希望であって距離を置きたい

の夜のお化けよろこぶ知恵おくれ

思う人間は不幸だ此の場合の阿呆は幸せだ。 喜劇と悲劇とは紙の裏と表だ、喜劇に涙を

一陣の風に逆う裾もある

なに上品に同じ場面を創り得た女の妙手上々 人の世の美空ひばりも年を取り 作句の設定がうまい教科書を見る感じこん

たい上五の出かたが面白い独特の軽味の句 もう母が追えない道を歩きだす これはぐっと砕けた作風になった老巧と謂 村諷子

[信が確たる形で迫る。親には辛い時代色か 時代の感覚がよく窺える、母の狼狽、子の 花

らなかった斯うするとよく判る説明は入らぬ いつも見てる情景であるがなかなか句にな 終電の女に我が娘を置いてみる

山の風富田林を通り抜け

は一段と素晴しい将来を楽しめる人だ。 山の人、岳人の面目躍如、個性の出た作品

に風があり、世の中見様で面白い。 この人にして此の句が面白い、高いところ 居心地の良いとこでない主役席

野辺おくる風が冷たい同じ歳

さは同じ思いの同年配幼な友達と来れば深刻 年々歳々花同じからず明日の我が身の淋し 千代香

風鈴の舌とりかえる熱帯夜

好い。 がこの句は圧巻。妙な熟語だがぴったりして 中七言い得て妙味、熱帯夜の句は多く見た

つかまってあげたい鬼に手を叩き

だ。 て行届いた用語に感服した。無駄のない作品 あげたいでこの小さい鬼との関係が出てい

実印を押すにも一度念を押し

抹の不安はあるが、情景は出ている。押すの 重複は稍々気になる処である。 実印だからも一度念を入れた世の義理で一

ネクタイの売場で値段聞いただけ

く出て苦笑させられる、これを枯淡味という やっとあきらめ辛じて笑い 枯れた人生の垢抜けした生活の一コマがよ 多久志

てに我に皈えり笑いに自省一分の隙のない作 やっとに干金の重さ世の圧力を感じる辛じ

生き様かも知れない。多くは此処まで行けぬ人世達観してみて言える境地とれが人間の 足 緑之助 生きざまは勝手気ままに言えるとき

水

夏の愛形を変えて鰯雲

45

第十四回

大陸川柳同窓会に出席して

尾

儿

栞

『今年の大陸川柳同窓会は博多で、やんなさると』

てんー「物のでは、水いらずですけん、よかばっ川柳同窓会は、水いらずですけん、よかばっ『水飢饉、水ききんというばってんが、大陸『博多は、今、水飢饉とぢゃなかですタイ』『うんにや、そうですバイ』

らなので、宴会も六時半に切り上げた。 大体四時から始める句会が、NHKのテレ大体四時から始める句会が、NHKのテレビ放送の都合で一時半 から 句会が 始められど放送の都合で一時半 から 句会が 始められるも無事終了した。

出すと出すと、当日の各氏の入選句の一句を抽きであった。当日の各氏の入選句の一句を抽きであった。当日の各氏の入選句の一句を抽きであった。当日の各氏の入選句の一句を抽きであった。当日の各氏の入選句の一句を抽き

柳川に日本のよさを見直され 小松園 大 八

北帰行生まれた駅がある旅順 日 満 大学府、柳川、水飢饉、梅ケ枝餅であ 北岸、太学府、柳川、水飢饉、梅ケ枝餅であ 北鮮、太学府、柳川、水飢饉、梅ケ枝餅であ 北鮮、太学府、柳川、水飢饉、梅ケ枝餅であ

の龍頭(リョウトウ)さん御夫妻と落ち合っの龍頭(リョウトウ)さん御夫妻と落ち合い田、一大四〇三号室のベット暮しであった。水三人、四〇三号室のベット暮しであった。水三人、四〇三号室のベット暮しであった。水三人、四〇三号室のベット暮しであった。水三人、四〇三号室のベット暮しであった。水三人、四〇三号室のベット暮しであった。水三人、四〇三号室のベット暮しであった。水三人、四〇三号室のベット暮しであった。水三人、四〇三号室のベット暮してあった。水三人、四〇三号室のベット暮してあった。水三人、四〇三号室のベットをいた。水三人、四〇三号室のベットをいた。水三人、四〇三号室のベットをいた。水三人、四〇三号では、水三人、四〇三号では、水三人、四〇三号では、水三人、四〇三号では、水三人、四〇三号では、水三人、四〇三号では、水三人、四〇三号では、水三人、四〇三号では、水三人、四〇三号では、水三人、四〇三号を下する。

豊かな稲の出来が話題になった。 登別な稲の出来が話題になった。 で、龍頭さんの乗用車で柳川迄飛ばした。 筑

最初、今年の同窓会は筑後柳川で開催というので、長年憧憬れていた北原白秋の郷里、柳河なら是非参加したいと考えていた。ところが急拠博多に変更なったので、私は何とかれたいものと、今度の旅行のポイントにしていた。丁度十二時前に着いたので、私は何とかた。丁度十二時前に着いたので、私は何とかた。丁度十二時前に着いたので、私は何とかたいものと、今度の旅行のポイントにしていた。日は彼岸の中日で有名なこの「御花」の車寄には、乗用車以外に二三台の観光がスが降りていた。

この料亭「御花」は柳河十二万石の城主立ての料亭「御花」は柳河十二万石の城主が花氏の末裔の経営になるもので、即代目立花との地名が花畠というたので、柳河の人々は「御花」と呼び慣したのが料亭の名前になったのである。

正面玄関に立つと明治を思わす立派な西洋的と陳列されていた。

年も前になるが、母が生存中嫁にやった福岡の為、予約なしでは迚も中食出来ません」とのれた時にふと耳にした事だが「本日は祭日われた時にふと耳にした事だが「本日は祭日最初玄関を入って、龍頭さんが入場料を購

た事を返すがえすも残念に思っていた。 の一家と、この「御花」へ来て、鰻のせいろの一家と、この料理も目的の一つであった。でも先程ここの料理も目的の一つであった。でも先程ここの料理も目的の一つであった。 でも先程とこの料理も目的の一つであった。 そもに事を返すがえすも残念に思っていた。

私は嬉しさで心がおどった。とれたよ、とれたよ」とささやかれているのが聞たよ、とれたよ」とささやかれているのが聞たよ、とれたよ」とささやかれているのが聞けが何処からか帰って来て、奥さんに「とれりが何処からか帰っている中に、龍頭さんの御主

歴代藩主着用の甲冑、金甲、墨縄の銃など 歴代藩主着用の甲冑、金甲、墨縄の銃など をれた。庭園は仙台松島の景を模したものだ された。庭園は仙台松島の景を模したものだ された。庭園は仙台松島の景を模したものだ された。庭園は仙台松島の景を模したものだ された。庭園は仙台松島の景を模したものだ された。庭園は仙台松島の景を模したものだ された。庭園は仙台松島の景を模したものだ された。庭園は仙台松島の景を模したものだ された。庭園は仙台松島の景を模したものだ された。庭園は仙台松島の景を模したものだ といわれて、園内の松は二百八十本、庭石が といわれて、国内の松は二百八十本、庭石が のだ。

これに 男名 に うれに 男名 に うれに 男名 に うれに 男子 に うれ に かった に 話の節々によると、氏は商談や何や彼や に 話の節々によると、氏は商談や何や彼や で ここへ再々来られるので、お馴染さんであったのだ。ナント良い人に御案内していただったのだ。ナント良い人に御案内していただったのである。全く感謝の外はない。 昔から食べ物の恨みはおそろしいというから、もしこの「御花」が不首尾だったら、この原稿を書く気が起らないでいただろう。 三味線具、あげまき、という有明海独特の三味線具、あげまき、という有明海独特の三味線具、あげまき、という有明海独特の一種類の貝のつき出しを始めて新鮮な刺身、

名乗る賞録十分のねえさんがつけ加えた。 名乗る賞録十分のねえさんがつけ加えた。 と答をおいた時に『お中食ですので、大体 たと箸をおいた時に『お中食ですので、大体 たと箸をおいた時に『お中食ですので、大体 たと箸をおいた時に『お中食ですので、大体 たと箸をおいた時に『お中食ですので、大体 たと箸をおいた時に『お中食ですので、大体 たと箸をおいた時に『お中食ですので、大体 たと箸をおいた時に『お中食ですので、大体 たと箸をおいた時に『お中食ですので、大体 たと箸をおいた時に『お中食ですので、大体 との農園作とてはちきれん許りの実のり方で との農園作とではちきれん許りの実のり方で との農園作とではちきれん許りの実のり方で という千鶴子と

女屋だったという橋の袂の前から乗船した。大屋だったという橋の袂の前から乗船した。巻笠を冠った四人は、昔遊上の乗船場へと行った。秋晴の九月の陽はま乗用車をここに置いておいてタクシーで川

ある。

愈々水郷柳河の川下りであるが、近年にない早つづきの川は水位が下って、水郷の風情い早つづきの川は水位が下って、水郷の風情が、紅萩の萩叢が丁度今が盛りで、時には萩萩、紅萩の萩叢が丁度今が盛りで、その間に白の並木が川面を 撫でん 許りで、その間に白の並木が川面を 撫でん 許りで、その間に白の花屑が川面に漂うていた。幾つかの橋をくぐると、蜘蛛手網が右に左にとかけられていた。この辺りでは川幅も広くなって、どうやた。この辺りでは川幅も広くなって、どうやな郷の情趣が感ぜられた。

橋ぎわの醬油並倉西日さし

「御花一の片側に着いた。 「御花一の片側に着いた。 「御花一の片側に着いた。 「御花一の片側に着いた。 「御花一の片側に着いた。 「御花一の片側に着いた。 「御花一の片側に着いた。 「御花一の片側に着いた。 「御花一の片側に着いた。 「御花一の片側に着いた。

> 矢印の通りに二度程曲ると、六騎神社に出 矢印の通りに二度程曲ると、六騎神社に出 矢印の通りに二度程曲ると、六騎神社に出 を立さあるのか、白秋は詩を書いたが地元に 要などあるのか、白秋は詩を書いたが地元に 要などあるのか、白秋は詩を書いたが地元に 要などあるのか、白秋は詩を書いたが地元に 要などあるのか、白秋は詩を書いたが地元に 要などあるのか」などと批判が続出 した。之は二十年程前のもめごとである。そこを さば観光柳河と詩と水郷の現在は夢のようで たいたことがあるのか」などと批判が続出 した。之は二十年程前のもめごとである。思 とば観光柳河と詩と水郷の現在は夢のようで たいたことがあるのか」などと批判が続出 した。之は二十年程前のもめごとである。思 とば観光柳河と詩と水郷の現在は夢のようで

そこを出て、帆柱の見える入江の四ツ辻をはフト郷愁の湧くものである。はフト郷愁の湧くものである。

それから間もなく、暮れるに早い秋の筑後れたようにあった。二階の勉強部屋に小さなれたようにあった。二階の勉強部屋に小さなれが一机関かに窓にむいて置かれていた。中庭に石で囲んだ井戸が忘れられていた。中庭に石で囲んだ井戸が忘れられていた。中へ入ると、城ケ島の歌がゆるいテンポで

花」を満喫した欣びを何度も何度も反芻して中で私は 念願の 水郷柳河と 白秋の里と「御中で私は 念願の 水郷柳河と 白秋の里と「御中で私は 念願の 水郷柳河と 白秋の里と「御田で私は 念願の 水郷柳河と 白秋の街へと走って行

柳友・鳥居金矢氏を憶う

―上方藤四郎として筆名も高かった人―

田 丁 路

福

氏と金矢氏は若い頃から親友でした。) ―編集部ど、金矢氏の半面が躍如として一編のよみものになっています。丁路すが「番傘」の編集を担当された当時のことや、戦前、現在の寄席なすが「番傘」の編集を担当された当時のことや、戦前、現在の寄席なり、「川柳寄席」を福田丁路氏が鳥居金矢氏に贈くられた時の礼状で

一前文略―さて、不二田一三夫氏の「川柳―前文略―さて、不二田一三夫氏の「川柳 ・ 一前文略―さて、不二田一三夫氏の「川柳

(先代)がつとめていましたから、もうこの人の名前がズラッとならんでおり、私はその舟んどの高座を知っていますが、このプログラムで見ると、人気者、大看板の春団治の出番が中ほどになっている。円馬の名も、三木番が中ほどになっている。円馬の名も、三木番が中ほどになっている。円馬の名も、三木番が中ほどになっている。円馬の名も、三木番が中ほどになっていましたから、もうこの人の名前がズラッとなられていましたから、もうこの人の名前がズラッとなられていましたから、もうこの人の名前が大きない。

……一種の職人的うまさで、やはりこのみ

自信ソー失して、たえずおどおどしているよ

私の籍を置いていた、『番傘』の水府さん

祝吟、弔吟をよませれば実にうまかった

6

でしよう。

この古いプログラム一枚に、当時のいろいるな観い出がよみがえってきます。不二田氏ろな観い出がよみがえってきます。不二田氏のという字」、ミス・ワカサの「コンタクトルという字」、ミス・ワカサの「コンタクトレンズ」ラッパの「はあ、さいなら」松葉家レンズ」ラッパの「はあ、さいなら」松葉家レンズ」ラッパの「はあ、さいなら」松葉家レンズ」ラッパの「はあ、さいなら、本語のいろいるな観している人でなければよめない、練達の句です。

を開店したとき、

一大阪の宿がよかった 旅だより という祝吟をもらいましたが、その短冊はいという祝吟をもらいましたが、二十余年前「番のではしたとがあるのです。手元に雑誌が残を出したことがあるのです。手元に雑誌が残を出したことがあるのです。手元に雑誌が残を出したことがあるのです。手元に雑誌が残ら、記憶はすこぶるあいまいですが、冷席通ら、記憶はすこぶるあいまいだすり。

ろですが、さいきんのようにすべてのことに していたし、相当事大主義的な面があったの 時の『番傘』は、ひそかに柳誌日本一を誇称 つくっていたのだから世間知らずもいいとこ など、まったく無視して勝手気ままに雑誌を いっこうに平気の平座で、先輩川柳家の思惑 ギに思うだけで、編集を担当していたころは だと思うのです。もっともいまの時点でフシ に「寄席特集」など、よく許してくれたもの 通ったものだとフシギに感じるくらいで、当 えると私個人の趣味に走った編集企画がよく 1ページに組んだおぼえがあります。いま考 くってもらい、子持ち線でカコミをとって、 とおぼしき同人数名に寄席の句を一句ずつつ ら、記憶はするぶるあいまいですが、寄席通 っていないうえに、なにしろ恍惚の境ですか を出したことがあるのです。手元に雑誌が残

がなつかしく思われます。

「川柳寄席」から好きな句、注意をひいた 可をひろいあげてみます。一笑ってるのは 高座の二人だけ 高座の二人だけ

―十銭のころの芸人 芸に生き

落語が泣く。

一般漫才の『南陽館』という千日前の『波屋中観漫才の『南陽館』という千日前の『波屋がなつまたいた。………芸に生きられたのは、テレいたがなかったからでしよう。

とっさに「お脈拝見」時代の西条凡児の名士―「テレビで云うたるぞ」とは喋べりすぎ

快な存在はない。 とで、妙な特権意識をもつ芸人くらい不愉 顔が目先きにチラついた。テレビに登場する

生き残りということか………恍惚にもなるはの高座できいている。すると私は神話時代のエンタツ・アチャコの漫才の封切を私は花月―「早慶戦」寄席の神話として遺し

落語だけでなくカブキの舞台で、山台に長髪―長髪で上方落語―守る気か

ずです。

でつっ。またで、高さない。 でカブキの味がひとたまりもなく消える。 が、かみしもをつけてならぶと、そのことだが、かみしもをつけてならぶと、そのことだ

ずで、長髪で古典落語などやられたら、古典落語家には落語家らしい髪の刈り方があるはたとえカツラであっても島田にかぎるようにたとえカツラであっても島田にかぎるようにたとえカツラであっても島田にかぎるように

と納得させるところが、詠術(私の新語ですった。しかしこの句、いかにもさもありなん人気の出ざかりは、夫婦であることをひたか人気の出ざかりは、夫婦であることをひたかとしにかくしたが、この節はそうでもないよど、またかとおもうこともたしか。

・・・・・・笑)のうまさ。

つ。 一奇術師が家庭で名刺見つけられ とれも創作だろうが、詠術がうまいので、へ とれも創作だろうが、詠術がうまいので、へ

一芸人が国会議員に成り下がり一芸人にきけば汚れた世界です一芸人の不運知らぬまに死んでいた

立候補するわけがない。成り上がりとはこれの強い芸人が国会議員になるが、彼らはむろの強い芸人が国会議員になるが、彼らはむろの強い芸人が国会議員になるが、彼らはむろの強い芸人が国会議員になるが、彼らはむろ

*

をいうのだろう。

後略

(鳥居金矢氏がミナミの「上方」という旅館は鳥居金矢氏がミナミの「上方」へ泊まられたとである。大阪へ来る芸能人、たとえば長谷とである。大阪へ来る芸能人、たとえば長谷とである。)

大坂形水著

川柳句集 谷 町

JII

柳

塔

社

売り切れました! ありがとうございました



ビール酌ぎガラスコップを染めるなり 萬歳の腰から下は隙だらけ 鳥取県 西 鈴 Ш 木 村諷子 幸

絹ずれの音に哀しい自我がある 繙いて女御更衣と秋の宵

戸 田 古

方

レールの上でヤンマが空中停止する お見舞に行けばお脈をとられてた 河 野 君

それは造花でバラ百本に棘がない 茶の味にうるさい老父に落葉する 美和子

睡蓮が眠ってふたりきりになる 神戸市

名案が出ぬまま寝れば夢を見る 雑兵は妻の意見で向きを変え 逢魔が時の鬼は女の方だろう 岡山市

水

金太郎

花氷女の虚栄あからさま でやかな夕焼秋を意識する 大阪市 西 出 栄

あ

母親に九月の開放感がある 少年の居るあかるさで秋が来る

傷心に秋よ心をくれますか ブルーで塗りつぶしたある日の自画 像

動かない樹氷黄泉に咲く華か 島根県

頰っぺたの飯粒食べてやり母になる 越 智

汚れてる女宝石だけ光り ふり向けば風がささやく音だった

候の文字に殺意は込められぬ 谷 寿

天皇に明治の羽織着せたがる

守口市 野 呂 右 近

何故ふるう中味空しい鉄パイプ 赤潮が陸襲う日は思うまい

江

度

羅漢さんが笑うたら運が向いてくる 雨乞いの河童へ満月すまながり 求

子

盃の底に嘘が残ってる 昔のこと聞けば昔の母になる 京都市 倉

芽

死ぬまでをどうにか生きるむずかしさ 青森市 I 藤

甲

吉

類ぺたがふくれ風船玉ふくれ 今治市 月 原

宵

明

瓢簞の風情にひかれて育てけり

白露のいのちをしかと草が抱く 定年へ鋳型いびつに なって来た III

京都市

杜

的

美しい老人として今日を生き

大阪市 小 出 智

子

高 橋 タ 花

先生と社長に弱い日本人

冊の句集へ古稀を匂わせず

景品のあたるアンケート嘘も書く 裏町の店それぞれの匂い持つ

守口市

羽

原

静

歩

小 砂 白

汀

深呼吸二度大ジョッキ飲み残し

米子市

西

雄

K

重なりて情緒乏しき月見草

鳥取市

河

村

H

満

水

米子市

木

干

代

国宝のように百才あつかわれ 飯盒の蓋が知ってるわがドラマ

馬

夢を見て何はさておき墓詣り 親鳥のつばさのかげという別居

島根県 榊 原

栗笑い心は冷えてゆく初秋 送り盆夏は背中をみせはじめ 岡山市 Ш 端 柳

納得が出来ずくぐり戸開けに行く おすましの人形で倒してみたくなる 子

遠くはげしく貴方を慕う深い秋和歌山市 松 原 寿 子

逢える日のわたしすずしい鈴となる

大阪市 城 修

史

人の世の絆別れてから気付き

厚化粧落せば女の黄昏る 羽島市 伊 藤 静 枝

運送屋派手に梨箱届け来る 藤 井 春 日

50

秀

子

	矢		秋		老		耐		映	1 7	F	ц	高		ス	人		B	サ		且	一起		庫	L A	1	加	暴		何
堺市	矢印を見失う日の初老感	東京都	秋の椅子似合う男となりにけり	富田林市	老松の根よ放哉の細い足	八尾市	耐え生きて鳴いてもチンチロリンと聞こえ	鳥取県	映画見て大きなテレビ見たと孫	老めに 戸重い夫を 急き立てる	りば見重いまれませず	1小屋のごろ寝へ一人女の子	M	東大阪市	スパルタももう通じない子の背丈	人前は妻に敷かれた顔で居る	米子市	日記帳の言葉短かし草もみじ	ピスで	富田林市	耳たぶに女が潜み風は秋	越すことの越されることの嬉しさよ	室戸市	風下に女の嗚呧が屯する	汗のショッ円が上ろが下ろうが	鳥取市	婦長さんと呼ばれ振りむく元婦長	暴力団事務所はどんな事務をとる	大和郡山市	信して百才にやさししず日蛇
高		山	5	岩		大	リリ	清	子孫	4	清	4	0)	斎	の背土	る	石	ľ	真新	中		嬉し、	石	98	うか	中	元婦	をと	森	皇
喬		根		田		路	2	水			野			藤	丈		垣		U	村		さよ	建			森	長	る	田	
千万子		白		美		美	国とう	_			۲			=			花						嘉			葉			カ	
ř		星		代		幸	1	保			ò			三十四			子			優			美			葉士人			カズエ	
位置			八戸市島田	青空のほころびに似た飛行雲	池田	出稼ぎのハガキ付箋がついて来る	長崎市 村 崎	ti	名古屋市 越 村	大衆の気配を聞いているマイク	尾鷲市 渡 辺		松江市 黒 目		寝屋川市 小 林	初盆の夫と三日過ごしけり	唐津市 田 口	15	今治市 園 部		和歌山市 若 宮	燃え尽きる夕日の素顔旺んなり	倉敷市 水 粉	あるときは豊胸と見る菩薩像	大阪市 白 石	風花につまずく日不孝の身	倉敷市 中 島	サヨナラが何故か今日だけ増す重み	海南市 牛 尾	当家でにたかったらしいシキヒゴで
73	早		昭		香珠夫		Ξ		枯		伊津		大		鯛		虹		Œ		武		千				彩		緑	
13	苗		治		夫		車		梢		伊津志		鳥		鯛牙子		汀		則		雄		翁		潔		平		楼	
出於了一個	政治家の涙の色を分析する	京都市山	皆出世置き去りされた同窓会	唐津市 新		和泉市西	シースルー肝腎なとこ透かず	阪市	せっかちの自動扉は手で開ける	岡山市 砂			年金でレジャーをつなぐ老後の	藤	肖像画の亡夫にこやかに我を見る	東大阪市が	ジェット機の尾灯吞み込み天の川	枚方市 宮	電報を酒のみながら読んで泣く	根果	n	兼宮市 十	W	岡山市	昂りヘシャネル五番をしまつせず	複	=	人阪市	3	八尾市
				初岡	け			新	9				日	29	兄る	竹	111			岩田			目	井	せず		られ	神		宫
4		本 規不風		阿 回天子		岡		川貞		田静		住 タカ子				中		Ш		田		矢		L				谷		西 弱
		443				洛								13		綾		珠		=		+		柳五郎		恵美子		凡		

			E 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1		-	平田市		泣き度くて触れし夫の手温かし
			七曲りした人生で肝ができ	代士男	交				だ。E由し、そう三量パン
伊勢吉	津	中	倉敷市 1			2	平 貧乏に甘んずるとは負け惜しみ	文	名 1 7 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2
,			第忘れ木の枝で食うヒクニック	英二	田	島田	八戸市		役職が変わり中元こなくなり
真	木	1	にはして)はでは、常、カーツ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・				香 騙されて人生訓かーでふえ	川紫	尼崎市 黒
肇 雪		4	1	型力	臣	H			堤防の孤独月光冷えてくる
芦	ŧ)1	E				7	田与	和歌山市 津
				敬一	原		岡山県		秋まつり土塀に赤いザクロの実
博方	道	岩					子 新米は法律用語ばかり言う	内 花代子	高槻市 竹
	Ĭ	らわ	子を抱いて稲刈る姑を見させられ	夢酔	垣	板			老眼鏡持たぬ外出落着かず
耕草		角	島根県				代 浅漬で夫と分け合う秋のなす	天千	具塚市 行
		7	白桔梗秋のおとずれ待ちわびて	笑女	田	吉田	宝塚市	13	773
勝美		11	大阪市			T	山 緑蔭のトラック窓より足が出て	原 七面山	岡山県 直
		カス	島の良さ計りも真似て馴染まれる	実	崎		唐津市		夏がゆく便り紫苑の花を添え
可保留	桶	高	出雲市				花傷つけぬための労り気がつかず	柳潮	高槻市 若
	i	する	実の入りの悪い稲穂がツンとする	紫浪	中		唐津市		真夜目覚め明日出品の菊を見る
御前	中	野	倉吉市				花 神至妙その指先に美を与え	田冬	熊野市 坪
		3	妬心ふくらませて女女となる	ろ亭	宅	=	羽祚市	Mh	娘の恋も見て見ぬふりで過ごす齢
大柏	倉	朝	旭川市				声 新趣向眼鏡に似合う顔でなし	雀	山口県高
			竹割った気性世の中腹がたち	曲ん手	林	大	名古屋市	か	ミシン踏む足もとに子らまといつき
半仙	H	泄	岡山県				子 月見草丘の暮色に目をさます	葉好了	寝屋川市 稲
	I	る軸	シャポン玉の様にすぐに割れる嘘	喜代美		山根	具 市 .		朝顔が窓の硝子に夏を描く
崩		欏	大阪市				き 夫にも負い目あります共稼ぎ	尾あいき	寝屋川市 宮
i		1	食慾を失う程でもないが恋	裕	1	佐々木	島根県		3
玄	野	100	羽曳野市			する	男 呼ぶ声を漫画のページで蓋をする	本光田	伊勢市 山
		られ	気まぐれに伸ばした髭をほめられる	比呂志		中原	藤井寺市		親しさが滲み出ているコップ酒
悠泉		小	東予市				史 妻の涙で何度洗われたか手鍋	操	青森県 五十嵐
			反対の旗へ勇気が今少し	兴彦	須鎮	那須	大阪市		銹ついた錠に似合うた鍵を持ち
桜山	原		倉敷市 藤		9	市向き	雲以下同文に似たる我が家の生活向き	野佳雪	今治市 矢
		吹く	秋朝がお老いらくの恋ひそと咲く	石光	出岩	伝垣	唐津市 桧		肩書は無いが大空無限なり
千世子	山	、轵	西宮市 朝				風 乾杯へみんな味方の顔をする	藤通風	倉敷市 斎
			家出の娘戻れぬ義理を電話にて	王風	里	「幡	倉敷市 小		勇退の弁が出かねる名誉職

水 煙 前月号から― 抄 旬

まで担保に入れて買うた家

0

現の夢を描いている方も多かろうが、この句るもの、大切な家族のために、マイホーム実 のようなものを感じる。 責任とが、男の肩にのしかかっている、 これからローンを支払ってゆかねばならない やっと自分の家が出来たのだと思う喜びと、 ンで家を建てる時代のようだが、一家の主た 頃はお金のあるなしにかかわらず、 貞 1

をされている。 命まで担保に入れて」とは、 うまい表現

民宿の朝の神棚拝まされ

染み、拍手を打っている作者の人柄がよく窺一一夜の宿であっても、その家の人達とも馴

したたかな老いナムマイダナンマイダ

るとおもう。 めない老人の所作が、よく現わされてい

母の嘘今も優しく生きている

ある。そっと呼んでみました。 の絆の中で、永遠に生き続ける温い嘘なので の吐露なのだ。子を愛するが故の驢、母と子 さしく蘇えってくる。その嘘は正しく母の愛 幼い時の記憶にある母の嘘が、 したたかな老いナムマイダナンマイダ お母さん! 甘くや

ることで、忽ち好々爺となる変り身の早さは さらけ出すお年寄りが、神妙に空念仏を唱え 若者の顰蹙を買いながらも、欲深く老醜を

憎くも可愛いくもある。滑稽味溢れた句。

の神様か、それとも地獄のエンマ様か。 死ぬ時にこそ真価がつく。お買上げは、天国 せていて面白い。当てにならぬ命への正札も、 奇抜な思いつきのこの句、句主の心も覗か 人間に正札つけたら笑うのか

の中にぼくのは一句も出ていない。つまり数 ろう。―麻生路郎著「新川柳鑑賞」五六三句句だけを採りあげているような場合もあるだ る。意地悪い見方をすれば、自分の書きよい ったものの、短い行数では書けないものもあ 賞者が「これは佳い句だ」と思ってペンを執くおられるが、別に気にすることはない。鑑 "秀句鑑賞"にあまり登場されない方も多

> ある)今回は三人が三句ずつ打ち合わせせず に持ちよった「秀句鑑賞」がこれ。

とだ。(ぼくの句より一年程あとで発表した 年間、一句も拾ってもらえなかったというこ

人は同句だったが採用された。こんな場合も

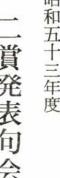
カナリヤの替りに蛇がトグロ巻く

であろうがこの句の場合、蛇が主役である。 外出先きから帰宅した人間(作者)が愕いた 蛇に、鑑賞者はユーモアを感じたのである。 締めつけ寸時も早くここを脱出しようとする この上はトグロを巻き、腹の中のカナリヤを カナリヤがふくれあがっているからだ。もう た蛇が籠から出られなくなった。のみこんだ こんで、ハイご馳走さまと、籠を出ようとし の悲惨事あるのみ。ところがカナリヤをのみ ここまではユーモアどころか、カナリヤ一代 逃げまわるカナリヤをのみ込んでしまった。 結び目がいくつも出来てる夫婦仲 ナリヤの籠の中へ、殺し屋蛇が侵入し、

ものぎこちない「結び目」に夫婦愛を思い、 ユーモアを感じたのである。 が鑑賞者にはよく見えるのである「いくつ」 そんな結び目がいくつも出来た。その結び目 小さな浮気、飲み過ぎの午前さまETC。

水まで水を探して来た蛙

もユーモアを感じるのだ。 ∥意志∥が違う。しかしどちらの蛙の動作にた−があるけれど、この句の今夏の 蛙 と はた−があるけれど、この句の今夏の 蛙 と は



有 信 新 之

助

賞発表句会と同人総

承題 題 題 题 婚切 宿 今日の主役たち・左から一節夫・鬼遊・美代・酔々の諸氏

好郎両氏から、その度に応答があったが、結答に入る。酔々、美幸、瓢太、柳志、敏、静答に入る。酔々、美幸、瓢太、柳志、敏、静全員一致で賛成して事業報告が終り、質疑応

十月八日薄曇りではあるが、薄着では肌寒さすら感じるほどの、爽やかな同人総会となった。文化会館五階は午後二時の定刻に、西田柳宏子氏の司会で始まった。 れつかな総会になりますようにと、川村好郎和やかな総会になりますようにと、川村好郎和やかな総合になりますようにと、川村好郎和やかな総合になりますようにと、川村好郎のまでも川柳塔を受しつづけてほしい、といつまでも川柳塔を受しつづけてほしい、といっまでも川柳塔を受しつづけてほしい、といっまでも川柳塔を受しつづけてほしい、といっまでも川柳塔を受しつづけてほしい、といった。 挨拶があって議事に入り、病欠された若本多

> 四、両川洋々、津田与史の三氏の新理事を、辻圭水、大矢十郎の三氏の新参事、斎藤三十 への吟行があり、来年は四国への吟行が、予会、茗人忌、鳥取川柳大会への参加、奥飛驒島静馬両氏が句集を刊行された。鳥取川柳大岸南柳の五氏の物故者があり、大坂形水、傍岸南柳の五氏の物故者があり、大坂形水、傍 岸南柳の五氏の物故者があり、大坂形水、は、竹中肖二、沢山福水、小浜牧人、城一氏から今年度の事業報告がなされた。今年 定されている事が報告された。植村客遊子、 久志氏に代って、好郎氏が会計報告。 城一舟 西尾栞

れた。 てほしいと、 川柳塔安泰であることを強調さ

重な姿勢を示された。 意のほどをよく検討する時間がほしいと、 する、対処の方法にも議論が伯仲したが、 「ますか こよく検討する時間がほしいと、慎(の方法にも議論が伯仲したが、真いと」九、十月誌上での一文に対

だが、他処かの会社のように紛飾決算ではな 内に閉会になり、懇親宴に移った。 れでお開きにすると、そのユーモアに爆笑の た-編集部)、お開きにするというから、 閉会といわず(閉の責任校了が開となってい いから、安心してほしい。おめでたい席では 趣味の会でも、運営の内容は似たり寄 閉会の辞に菊沢小松園氏が立たれ、どこの ったり Z

には、会場の席が足りないほどの盛況で、午後七時に柳宏子氏がマイクの前に立つ 熱頃

経済状態ではないので、常任理事会に一任し 論として、将来を危ぶまれる程の不健全な、

かの関わりをもつ人々から見れば、この文字ないのだが、川柳塔の人は勿論、川柳に何らから見れば、たった六つの文字の配列に過ぎ 第に厚みをもった広がりを見せて、やがてそ の尖端が、新しい方向にむかって流れだして の配列に何かを感じるのではないだろうか。 どこの社会にもあった新旧交替の渦が、次 窓を明け放つほどであ 川柳に関 わりのな 0 17

精神を確実に受け継いで、現代感覚で物事を路郎師の直接の息がかからなくとも、その 代表する作品群である。 してゆく、現時点での充実した川柳塔の姿を 洗練された技法を駆使して、それを表現

行く、そんな光景を思わせる、今年度の受賞

それに加えて、何ものに 日の川 奔放に表現できる川柳塔賞の作家群加えて、何ものにも束縛されない自 柳塔へ絶えず新風を吹きこんで い自

JII 柳 塔 社 任 事 10 月 4

会をひかえての 数日 新参事三氏、 開らかれる二賞発表句会や同 致で推薦することになる。 新理事三氏の雅号を全員 常任理事会だけに、やや緊張 協力者であ それ回 人総

から異存があろうはずがない。 ぞれグループの代表者であり、 わし、全員一 ますかっと」9月号の<臨川亭秘 山最後の日 <u>1</u> 政田大介。 という見出 話> JII

蔵

風

「さんが執筆することに決まり、

推定

手に、が が盛りあがっていった。 くれる、 が、当日の席題にもある「祝福」の雰囲気(状が読みあけられるたびに、湧きあがる拍 受賞式は川柳塔賞準二席から順 当日の席題にもある 力強い存在であ 次行 われ

カメラ 板 돖

人

があってこそ川柳塔の「根」は永遠である。敵」も「祝福」しあう栄誉の二賞。この友情 五卓、 社のお家芸だ。ペンを置いて箸とれば、 五卓、四十四氏の「笑顔」が「順不同」、み店)で開らかれた。1テーブル9人、これが するとビールと酒の出番だ。 社のお家芸だ。ペンを置いて箸とれば、「宿んなが「主役」という和気あいあいは川柳塔 第二部 竹原の山内静水氏の乾杯の声へ満場が唱和 四十四氏の「笑顔」が 一つ まり懇親宴が、 南 海 飯店

られる。 「もう句会やめとこか」とご機嫌 早よ会場へ戻って句を作らな」と、 しかし句会は五時半からである。 の方も テー ti

を携えて出席。しかし同誌10月号の文章(2) 事の抗議文はおシボリにすることになった。 の席上で同誌の9・10月号を読み、 は好意的であるとB常任理事が発言する。 ないことである。 しには、 造社企画の大家シリーズの ではないか。 場合があり、 集部のスペースの都合で、 旧不朽洞会々員が無関 A常任理事は抗議文の原稿 会々員が無関心ではいられ のような誤 解? 挙登載の出 A常任理 が生じ

> ルを離 の窓から見る「近鉄」の赤と青のネオンの 会場へ戻ると秋の陽はすっかり落ち れる人も

・節夫・柳志・〆女・喜風・綾女・武雄・あ美・文秋・岳人・小路・守宙太・弘生・静水幸・雀踊子・茂雄・凡九郎・形水・重人・勝・水客・好郎・紫香・潮花・薫風・吸江・美・小松園・頂留子・古方・酔々・右近・幸生 芙巳代・鎮彦・花梢・維久子・史好・英子・いき・度・育園・蘭・恵美子・誓二・智子・ 瓢太・生々庵・萬的・滋雀・柳宏子・与呂志子・十郎・喜一・寿馬・鬼遊・新之助・敏・ 冬二・三十四・亜成・喜美子・千万子・ ・庸佑・美和子・千寿子・としよ・一二三・ 和子・弥生・寿美子・幸・天笑・美代・千梢 みず 句 ほ。 栞・ 風 ・太茂 •

てほしいと、主幹からも助言があった。五百枚の大物だけに、川柳塔社挙げて協 送ってこられ、その使途を照介していたがご 北海著「ハワイの伝説と史蹟」50冊が本社 返事なく、 句会の賞品に使わせていただくこ 柳塔社挙げて協力し Ш

潮花・生々庵・古方・栞・薫風・好郎・小松 的・岳人・一三夫 太茂津 . 形水· 柳志 ・水客・

F



今往昔浪華正夢

土涯を終えた。 い気配を見せ初めて皆ほっとしかけた 猛暑続きだっ ・岸作太郎氏九十一歳の長い た今年の夏がやっ 2

生活を静かな中に華やかにその生涯の倖せな川柳塔の前身川柳雑誌社以来の長い長い川柳 然の侭の姿で瞑目されたのだった。 幕切れは本当に大日輪の西へ没するような自 恐らく川柳塔でも最 であ っただろう。

掛けた言葉は

ら私はその顔にさようなら、 遠ざかって行く人の後ろ姿であった。 ぎ去って行く、行者の面影を、 た呼べば答える落ち附いた表情だった。 その生涯の活躍にも拘らず、仏になっ は静かな水面を見るように笑みさえ浮べ 微塵もない落ち附いた足どりで静かにて行く、行者の面影を、悔や思い残す 何も彼も遣り遂げて後も振り返らず過 御苦労さんと言 心か

としても稀に見る九十余年という年輪から滲その重厚さは川柳人としても又一般の人間 その重厚さは川柳人としても又一般

> を出ない時代だった 生の低学年だった私が客として月に時、近所に住んで居たのに始まる。 と言うも 出ない時代だった。南柳さんが初めて私につった、当時子供の散髪代は十八銭か二十銭の低学年だった私が客として月に一、二回、近所に住んで居たのに始まる。当時小学 因縁は六十余年の以前に遡る の東雲町で理髪店を開業して であ ろうか 思 えば私と南柳 さん れ

と私の懐しい思い出の とよく「ぼんぼんこちらへ」が てくれた。往年よく酒が廻って御様嫌になる「ぼんぼんこちらへ」と、椅子に掛けさせ 出た南柳さん

仙、杉原大研子、清水白柳子、友帆、魚住満潮先生も大抵顔を見せて居られ、当 時 好 崎申月支部句会が南柳さんの階上でやり麻生路郎の弟友帆に依って南柳さん方に設けられて毎 が始まった。川柳雑誌社玉造支部が清水白柳せるようになって御互い川柳人としての交渉 会へ出掛ける頃、 その後昭和の二三年頃私がぼつぼ 南柳さんと句会で顔を合わ一三年頃私がぼつぼつ川柳句

> さん方へも甚だ御迷惑を掛けた。 毎月の句会も活気溢れて句 れて句会の後も喧々ごう。血の多い連中ばかりで 値解子(当時鬼丸)私、 今から思えば南柳

その生涯は倖せな人であった。 しい、然し人事を尽され天寿を全うして逝く 私と雀踊子の二人のみ、有為転変唯々往時だ のがある。 いは色々な事情で川柳界を去られて、今は唯 当時の人達も今は多くは故人になられ、 夢の如し、月並ながら感また一入なるも 今また長老南柳氏を亡う本当に淋

ち後、擁されて理髪組合長として何期も推挙設してその団長として青年修養の第一線に立新風を入れて世の注目を浴び理髪青年団を創 道に、石切剣神社に及び理髪組合前に、その西に四ヵ所、即ち成田不動尊境内、信貴山々 声を博されたと聞いて居る。川柳の句碑も関され、生来の雄弁家で、大いに斯界の為に名 の看板を掲げて異色ある理髪店として業界にで開店、戦災に遇う迄営々として男前製造所 でも幸福な生涯であった。 数関西では断然第一人者である。 当辛苦を経て斯界に入り大正七年玉造東雲町 校卒業後弱冠十七才笈を負うて大阪に出て相 日、幼時大和五条に移り、五条尋常高等小学 生れは福井県で明治二十一 川柳の句碑も関 年四 その点 +

優秀な成積で入賞して居られてよく店頭へも 肩に颯爽たる姿を見た旁々方々の写 い頃より写真撮影に熱心でよく 今のようにカメラの普及し 真展でも カ メラを

の艶話を白柳子と一緒に聞かされた。 5 女の子に騒がられたとよく戯談に南柳さんか てない時代であったから何処へ行ってもよく 聞かされた。事実なかなかの艶福家で多く

ず病を得る直前まで活躍されたことはよく人 を主宰して毎月句会を催して飽くことを知ら 健康で天寿を全うす。多年駒つなぎ川柳会 に恵まれ、趣味に生き、営業に成功し

松の内わが女房にちっと惚れ

うほどの美しさ。たしかに惚れ直すだけの値 お化粧をして見ると、これが我が女房かと思 だれ勝ちだが、さすがに松の内だ。ちゃんと平素は忙しいので碌に白粉もせぬ、髪はみ がありそうだ。

道問へば一度に動く田植笠

一家総出で田植をしている。 あ ぜ道

麻生路郎選

古川 柳

評釈

味

٠

八木摩天郎清記

紐の赤さなどが想われていささか艶っぱさも いたみんなが一度に顔をあげたのである。 いいでしょう」と声をかけると、田植をして いかにも田舎らしい風景だ。早乙女の笠の 「どこそこへ行くには、どちらへ行ったら

身どもらがまたきんしたと禿いひ

づたいの旅人が

ある。 右々と麦から顔を出していひ っていたら、不意に麦畑の中から顔が出て、 岐れ路に来て、どちらへ行けばいいかに迷

伊勢へなら右だ。右だと教えたというのであ

武者一人しかられて居る土用干

…」と名乗りをあげているところへ、主人が は寄って眼にも見よ。我れこそは清和源氏… 出て来て なるものだ。槍を小脇に抱え込んだりして、 「ヤアヤア遠からんものは音にも聞け、近く 土用干に、つい鎧や兜を見ると着て見たく

である。 ここらを片づけんか」と、叱られたというの 「オイオイいつまでかかってるのだ。早く

妙薬を開けば中は小判なり

病になやまされているのを気の毒に思い、 講談本などを読んでいると、浪々の身が貧

> あ の知る所である。 ろうと思う。 瑞光院義賢牧翁居士 好漢よく静かに瞑すべきで 行年九十一歳

月雪の見果てぬ花もない仏 小松園吟

迷惑な顔はまつりの牛ばかり この妙薬は即ちそれである。

は妙薬だからとて恵んでやるところがある。 物乞いの真似は出来ぬとことわるので、これ 金だと云えば痩せても枯れても武士の果て、

で、あどけない禿が、侍の来たことを身ども

来んしたと云ったのである。

きんしたは来たという、意味の廓の言葉

も盛んに行ったものだった。どやどやと押し

の吉原はなかなか豪華版だった。

侍など

昔

かけて行って、身どもら身どもらと云ったの

を日本の三大祭と云った、江戸の山王祭は将京の祇園祭、大阪の天神祭、江戸の山王祭 りだ。氏子の町内では囃子台まで設けて、ち うので特に町奉行では各町の町役人を呼び出 ひけをとっては将軍家の威光にかかわるとい 軍家のお膝元のお祭だけに祇園祭や天神祭に ゃんちきちゃんちきと騒いだ。江戸 そのお祭の時に、牛ばかりはただ黙々として である。そうでなくともあそびずきな江戸下 するように」と命令的に言い渡していたもの 山車を曳いてゆく。そこには疲労があるばか 級民がどんなに騒いだかは想像に難くない。 「本年は山王の本祭であるから盛んに執行 0 祭の華

飯はよいものと気のつく松の内 やかさを誇るかのように。

るものと知らなかったのも面白い。 判った。毎日喰べていながらこれほど味 を喰べて見たらやはり飯のうまさがしみじみ 手には餅をやいてすませる。ところがふと飯 お正月は、殊に松の内は酒びたりだ。 合の

\blacksquare 代

大

物

12

カン

\$

真

鯉

0

日

な軸

神

主

0

裳

75

カン

to

3

宮

詣 h

古 方

衣天

詣抱詣詣に福歳詣詣詣る詣詣詣金ゃ真バ詣詣詣 H 見神の実の背晴が主はなはスレだへラ栄で鼓か

とした 本春洋雀柳優 登美 虎 多賀子 山棒日々声郎 也 秋子銭子 宮お宮宮次宮宮ア七初難二宮ジ父元すま 詣さ 詣 詣 の 詣 詣 イ 五 着 産 た 詣 1 親 旦 こ た りがりり子りりデ三もも親りンはにやー 社うやのしズ家まか人 でではのコにを創いたのでとに氏のチャッパン 馬二工前人棒風男生有人子草大志失路

大宮オ宮神 モ詣様 鳥詣 居り ナッりも 地に人く主屋カー佳みりパ主は祝寝ア ぐ役 メ言 れは動う云 ば賽縄を泊ばを泊 銭追ああい 箱いり くび宮 宮詣り おなり 里無峰木凡 風人雪魚郎

け者対抱く嬉に夫の々じようヤ

近酔月

素木美右洛思

来

年

は

7

3

0

来

す

宮詣

光

日日

ti

祈

h

£

中

下

から

あ

3

宮詣

馬

のは況

0

追

7

が子な日促揺日よ

い勤めずれればがされずれまれず

近年を

対に対している。

宮孫宮宮子祝三宮宮宮祈宮宮宮年シ写親宮宮宮

りいりり託ののりりりこりりりのツ屋カりり まて父の母専を言た孫にみ供をれました系太太

届論会感点に着大の原本を明確している。

祝寝二前待旗意日なの祝

国めの儲て神は

母父再乙小祝祝祝祝祝祝祝敬祝祝晴祝 の三日日日日日日君日い天日 にのがのををののは日のだ の はどうあれる はどうあれる はどうあれる はどうあれる はどうあれる で身内でに でりまれる でりまる。 早寝喜わき荷院てる軒 深 可 柳軒 句 操 信 ろ 代 方 素 夕 七 静 方 八 文 保 五 太 味 中 二 亭 男 大 郎 路 山 枝 大 銭

加 貞 Ш

-58 -

課 題

雑

踏

1

云 祝

う祝日の

ıfn

0

臭

13

込

ま

n

無 寿 操 芳

予祝敬 終溶日神祝祝祝祝祝祝健兼百祝祝祝 備 老 日 日 H 日 日 4 H 康農歳 を 0 日 炉丸 \$ 校 10 1. の小 か はの の連休帰省子母 日 17 3 のを 佳が 日祝數 中に男 4 えて L な 17 日 日 に祝 7 祝げ 指 3 が父が 日 出 切 れ我 日 1: 玉 * 日の 祝日か のな をい 旗 b 課 17 家 5 吸旗 祖 ま母 0 無 振 な 13 足 0 " だ知らず 色も褪 父 \$ h 0 人もい 18 母 0 袋を履き 3 から 17 祝 臟 知れ 誕生 切れず ピンチ 待 祭 祝 勝 にえる 5 和 日 ち 日 3

美保子

の割ち親の当が方

0

1 靴

親が口説かれ

進車美方

旗 本

を

赤一棒

足

部

課長の

か

ラ

フ

ラボート 親

0

戚 7

が ゴ

伸

が馬の

背に

就職

短

か ル の夜

当び方

3

ル

iv

だけずれ

規不風 軒太楼

かそる

か ル

7

の上にかくあぐら

ルマノル

7

聞きあきている ノル

A 重里

セは遠

き

たノル

7

羨む主婦

素身郎近

0

ノル

7

は月

月 ちびた靴

木金金

右貞度一

棟 内

1

ルス

0 りし

ルマ

秋の陽釣瓶落ち

仙

気

盛

次

0

1 無い

ルマ

へ身構える

日

史

アフター 力旺 1 0 い日

ケアノルマ

のも物足

つりず

本蔭棒

にノル

近無枯木越可茶虹彩

江人梢魚山住人汀平

祝

日

12

季

0

豐

5

盛

5

れてる

四軸

良

出 村 志 選

どんたく 明 柏 苗 馬 日 J 棒 片左す 褒 賞 h 車 記 グ 减 遷 ラ 减 t h 帳 0 + 0 軋 平 った靴をノ 妻 フの先でセ 1 12 靴の 和 乗つてノルマを ルマもなくてぬる湯 から h から 居てノ で 1 私 ルマ , ル 語きく日 ルマ ル ル 7 1 -ルス叩 7 のことに マきつうなり など 譜がくる があざ笑い 0 知らず シノルマ 7 か> からく 染み れ 3 柳五郎 カズエ 句 味地 風 前

人

生

出

稼

3

冠

3

旗

日

0

メッ

宵

遇

疎

0

子

から

H

0

丸揚げる分校舎

早

祝

H

を

×

K

12

は

かどる

野

良

0

汗

大

植木屋にノルマを課してなめら 子晚 終尺 電蠖 0 酌 車 0 顔 が から 金 ノルマが一つねむりこけル マ がすんだ枝の位置 ダ 色 ブル ノルマ ル 7 0 果 U グラ to n H 可 住山志柏馬

マとは苛 酷 と訳 すセ 1 ル ス 7 潔

ル

0 1 ル ル 7 7 始 追われ天を見ず ま 3 幼 闡 どんたく

酔

あく

1

ル

などどこ吹く風の太りよう

ノル 振る手に ンの家庭 ノルマはいつもツケで来る ノル ノル ばし 7 で ル 不 業 ファ ノル 7 振 マく マのつらさ君知るや 0 イトへ ノルマ シノル に欲がからんで来 てくれる棒 12 徒 火 ノル マを 触 労を 込む今日 マで躾 れ などある 7 火 叩き出 懐 へをつ ね け 太っ T グラフ けら 5 する しけ 0 朴桜近竹隆耕 明 二平 明治治坊竜山江馬子草

- 59 -

か步数室

題

朗

一十名となった。私 タッ て早くも ことしては大変な勉強をさ チされた柳 九 意欲 友の数は二百 カ し続 月 けてい 0 星霜

●あなたの句を眺め、味わい、音読しているう●私はあなたと対話をしているのである。●私はあなたと対話をしているのではないのご理解を頂き度いと思う。 るのが てあ く反対のものに変ってし ちに段 んのご理解を頂き度いと思う。る点を、久し振りに復唱させてせて頂いている。そこで私の音 あなたの句と参考句とを比べてへの参考になればという私の願 る。 :当然である。換言すれば、それはあな。。時には句材までが変貌することにな 7のものに変ってしまうことも往々にし、一歩二歩と進むと、あなたの句境と全)の中に書き添えたのである。私の柳想 々と私の訛りの句になってくる。それ れていると自覚され べて、あなたの ば、それはあな いである。 あなた

> はなく、 てあるのだから誰は であ ない。従 黙殺しておけばよい。 たい。尚、この欄は批判の対照になるものでたいと念願し続けている私の意欲を諒とされたいと念願し続けている私の意欲を諒とされた。いうものである。恥のかき合いをき合えるというものである。恥のかき合いを る。ご精進を祈って止まない。 んって ばよい。ひたすら前進あるのみや批判する人があったとすれば まらぬ 室という看板がちゃ はばかることなく、 本を並 句が行列することも べるた 8 へ、恥をか 0 欄 Co

丸い 丸まった背は (一世紀生きて心も背も丸く) く手を継ぐ子等に 世 く手を継ぐよい子らみなよい 辿り着いたら丸木橋 _ 世紀生きぬいて 差別なく 不すみ 同句昧地

丸々と育った孫を持て余し、丸く生き晴耕雨読へ心満ち) 一へ心の刺がひっかかり

(〇×で高裁のエラガタ決めら丸×で高裁官の投票決め

同貞

子

丸

満月や人恋しげに池に降 **ベ々と肥満児ひそかに憂い持ち** (月丸く人恋しげに池覗く) 々と肥満児ひそかに憂う母 3

、薬の色とりどりに老人病 0 七色わび

共に恥をかき合うところに価値ある勉

なたと私とを衆目にさらし

番号がまあるいお腹

見

つけ

たり

同同

なかを見

つけら

れ

い顔

まん

丸い欠伸する

静

口下手は話上手に丸め

くおさめて年

丸寝する特技が 丸だし (丸だし んしの寝 製る働き者のが ちおりを労られ のお国訛り 元つめら >勢揃 n n 1

志

生

ラブシーン月の丸 丸い輪の中で貴方へ距離を置く核実験丸い地球に汚点をつい (ラン デブー月があんまり丸すぎる さが気に入らず わく け

(つずまいた石丸々と笑みかける)つまずいた石が丸くて怒られず

〇×で潤い 丸腰になって菊にとりつか アンケート丸で囲んだだけのこと 人々と 九々とお 肥っ ちんちんさげた呱々 たヤヤですオト のない子に育ち コで n

もめごとを丸くおさめた年 の功を見直され んめられ めら れ 0 功 声 可 同瓢同同 保

太 留

れ 静 同伊

佳

同同寿 子

無

60 -

費 九千円(池田から現地まで往復バス 整郎賞受賞祝賀記念 合 午前九時三〇分、阪急池田東出口タ クシー乗場前。 クシー乗場前。 お調行ホテル「すみや」 京都府亀岡市湯の花温泉 電話〇七七一二ー二一〇三九四	の田舎・民芸の	(白檀の扇子が丸い風作る)(白檀の扇子が匂う丸い風 英 子シースルックも丸見えとはゆかず 同	木橋渡る)同	島とうきでこなも賭けの余生 にも行かず丸儲けの余生 度 祐 腰が遂に勝ったりハピーエンド)	腰で強いヒーローザーエンド 同老の顔立て丸くおさめよう 同な策へ指の丸サイン通じない)	サイン金策ままならず 保夫の石肌丸く耐えている) 同って石肌丸く川の底 同	を包く乙女と見えぬ丸い胸 抱くと見えぬ乙女の丸い胸 レゴの丸嚙りに若さがあふれ) 丸嚙りも若さあふれてる 柳五郎
会む)。 会む)。 会む)。 会む)。 会む)。 会む)。 会む)。 会む)。	湯く	口下手が丸く話をまとめて来 同(八百号王の目玉が丸く笑む)	い孤を描き王の八百号	E石の丸さて秘めた浮き沈み 同流木の丸さが語る過去の夢 露 杖仏檀の前で心が丸くなり 同	なと太った孫へ肩がこり と息を入れて話が丸くなり との可聞と消えて家丸く	暗記試験がすめばみな忘れ房の湯加減も聞き丸く住み大々と肥えて豚の子褒められる)	豚として丸く肥えれば誉められる 同おのれの血白布に丸く丸く染め 同五重丸日記に濃く勝った味 三 和三重丸声がら先に飛んでくる 同
(新切午後二世) 会池田駅解散は午後八時半の予定。 会体時社の方のご参加もお待ち致します。 会はたん鍋(猪肉)不向きの方には牛鍋を用 意しています。 主催 菜の花句会	莫迦西尾 栞	先 岡山県倉敷市	を 1301年7 (17)予後を) ちゃが来て客筋が悪くなり	中まで丸出し女に得な画かは知らぬが女の丸	ってらまどなくないない質丸窓が秋を絵にする虫の声)窓に秋忍びよる虫の声	子には勝てぬ道理と丸められの丸さへ風も丸くなり	掌の中の小石が丸くなる日待つ 同れ焼きの豚の話も戦友会 戸町を支出しにして募れれる

大 JII 柳

出

入選

投句総数 五百四十九 句 郎

葛藤の出口求める一人旅 ターミナル出口大きな息を吐き 天笑

出口まで来て釣銭が腑に落ちず 大阪 美 子

出口だけ小さく開けて倒産し

銀行の出口扉の重

上いてと

英

子

和歌山

としよ

継ぎ足しの旅館の出口迷路めき

首尾不首尾出口の扉が知っている

スランプの出口を探る日が続き 打ち出しの太鼓出口へせき立てる 手探りの不況へ出口の灯も見えず 折角の和解出口で揉め直し 大阪 和歌山正 闡 博

閉会の辞聞かずに込む出口 鳥取 杖 人の世の出口花輪で飾られる 倉 敷 大

人生の出口はのぞかぬ事にする い傘が待つ出口 塚静 原重 馬 出口へ向く足止めさせたホームラ 水道の蛇口叩いて渇水期 名古屋 素身郎

親の枷抜ける出口で子を祝う 出所する出口一 途な愛が待ち

中座する顔が出口の席を撰り

幹事さん非常出口もチェックする

俄か雨うれし

敗退の 出口まで送る女にある打算

人生の出口へ来てもまだ迷い

答弁に出口も持っているゆとり

弱点をつかれ出口のないあせり

長かったトンネル出口のあかりさ

良

カズエ

出口から入ろうとする札の東 里 風

ぶ足 人生の出口へむりやり流される ぶ足 大阪貞祐 人の世の出口へゆっくり惑わず運 里帰り駅の出口に母の顔 倉 敷 春 H

裏口から入り出口も金を積み肩書を出口に捨ててきた軽さ 出口から教育ママは先に定め 馬 楼

未練まだ部屋に残してきた出口出口まで送りひと言本音吐くい 和歌山 幸 長いながいトンネル出口はまだ遠断ち切れぬ未練へ出口の無表情

地下街で迷い出口でまた迷い 俄雨駅の出口で知る善意

出口にも待つインタビュー

出所の親分派手に迎えられ 幸

岡 山 凡太郎 光

満月が憂き世の出口かも知れぬ 寝屋川 度 入口があって出口のない修業 思慕の石積んで出口を遠ざける

逢いにゆく嘘が出口に落ちてい

入ったらすぐに出口を探す金

雄

傷心の出口を母があけてくれ 富田林 梢

出口からやっと約手を落し

昭和五十三年度 五四三二 ベストテン(九月現在)

憲好千花幸 一代梢 七、〇 四、〇 一六、五 五 富田林 米子 和歌山

る

魚

〇九八七六 静筒一百和武 二 馬子三酒子雄

Ξ Ξ, 0 0 0 0 0 Ŧi. 和歌山 倉 歌山 敷 É

六五. 四 正露里方美 博杖風大幸

どんたく

八八八九九九 倉 倉

1 文

秋

1 Ŧi. 以下略 阪

> 開 十二月二十五日 三句以内

583

堺市堀上緑町一一三一七

藤井一二三方

大萬川柳係

「計 算」三句以内 締切 十一月二十五日 投句先

取 昭和五十三年度最終回 十四年度第一回

和歌山 鳥 pf 昭和五

五

Ŧī.

操 子 著

高

橊

川柳句集 利

送料 頒価 著者負担 千五百円

編

集

大阪

へ投句してみないかとお

L

NHK川柳募集

課

題

旗」川

村好郎選

ハガキに三句以内

締切十

月

序 文 川柳塔社主幹

岸和田文化協会々長 西 出 漁

跋

不二田 Ξ 中 島 生

K

庵

十一月十日発売。

これ

からの

句集を上梓さ

夫 波

れる方の参考になると思います。ゼヒ一度手

にとってみてください。

発行所 JII 柳 塔

社

雅号ぶっちゃけばなし

道 子 (174)りして頂き作句、気がついたら五年が過 をうけ、何も分らないまま、手とり足と 川柳

か

4

が

そ

いをとめてつけたそうです。でも私の場合雅号より姓道子と云うのは世の中の道を真直ぐに歩いて欲しい願め雅号ももちろん本名です。母から聞いたのですが、 ことがありません。 に興味をもたれます。今までに一度も正確に読まれた ぎ去っていました。こんなに続くとは思わなかったた

ますので、どうぞよろしく御指導の程お願い申し上げ した。姓同様忘れられない句を作るよう努力して行き むずかしい姓で自己紹介に困り一 最近やっと川柳を一生の趣味にと思うようになりま

神夏磯

四十六歲 主婦

み

5

発 表 しく」係 NHK近畿本部「老後をたの

送り先

T 540

大阪市東区馬場町

十五分ラジオ第一放送(全国放十一月二十五日(土)午前九時

老後をたのしく」の時間です

— 63 —

柳 原 稿 界 締 切 展 每 月 末

本本社がら、海大田 (日本) (1) 本本社がら、海大田 (1) 本本社がら、海水田 (1) 本本社がら、海水田 (1) 本本社がら、海水田 (1) 本本社がら、香川 (1) 本社でお取った。 (1) 本社でお取った。 (1) 本社でお取った。 (2) 本社でお取った。 (3) 本社でお取った。 (4) 本社でお取った。 (4) 本社でお取った。 (5) 本社でお取った。 (6) 本社でお取った。 (6) 本社でお取った。 (6) 本社の (6) 本

木摩天郎

市 は

四の八加藤香風方。
四の八加藤香風方。
□四の八加藤香風方。
□四の八加藤一方。
□四の八加藤香風方。
□四の八加藤一方。
□四の一方。
□回の一方。
□四の一方。
□回の一方。
□田の一方。
□四の一方。
□田の一方。
□田の一方。
□田の一方。
□田の一方。
□田の一方。
□田の一方。
□田の

大阪府退職年金受給者連盟 大阪府退職年金受給者連盟 を発行「連盟だより」からの 発行「連盟だより」からの 発行「連盟だより」からの を頼締切の都合で本号にない。(前号へ発表のところか。(前号へ発表のところか。(前号や発表のところが。) 「本種切の都合で本号になりました) 「本種物の都合で本号になりました」 「おい川柳する愉快な記 を記した」 「本種の本名でなりました。

棚 がの紫▼ あ

誌 某 点 ボ 本 両 二 一まル氏田 の?」
三夫氏は、水客

月15▼の▼こ▼の▼野て▼わひ▼ 15日 P辞 Pに P花 P君繕 Pず 日締72 65小62-48子う29 き P よ 21 ▽ 町|日 せ 一前下号 中の元だけと て下号か段訂 き中 で段日12 ら20正 であ 建行目

157日 | 147日 | 157日 | 167日 | 167日 | 177日 | 閉 のに 会

二月号発 発表 îi 12月

新

彸

昌

紹

線境時の▽日締72

Ш 南 III

柳 海電 枷

h III

4

(新宮市

大 计 植

矢

郎 水

理

化

粧

(姫路市 課

村

客

遊

鉄

枷

rhi

三国鉄川 不大阪川柳

柳 to

人連盟 同

(鳥取市 (東大阪

好

会 車 5 4 梅 惠

藤

三十

piq N

柳

b

Po

#

(和歌山市

津 西 斋

H III

与 洋

中

など言 浦う ス F か ▼ け 催か ▼ 益 内 時 南 三 一 ・ 氏 で ▼ ゲ で ら 東 ら 。 ら 本 で か 南 の む も 日 12 堺 原 東 大 ・ 題 松 太 片 開 の も 毎 日 5 堺 は 。 阪 画 は 峰 版 田 画 性 権 に 版 田 画 性 権 で の ・ 田 田 田 性 格 日 6 堺 。南鉄藤 題海川井堺偲 会かは 阪川 町川間 安定・目は 市柳 時近中会 は電柳一市ぶ開ら八山鉄会二上(催一木 代鉄央は・永公25 一上緑町 - 二三緑町 - 5 出向・差堂 6 大大20 上 直 で 6 種和民日 町題題城天 • 駅館 6 一郎 持南 2 時 か開時 の句城舟宅

柳同窓会ご出席の寄小松園氏が福岡から一チに浮く裸―紫香一夕陽は真っ赤です。水客は只今就りハワイは楽しみの紫香氏がハワイから

ち 味

.

題

4

日 題

ワ氏△

50- 繕

補

岳子喜▼一園川▼せ大▼コ寝多 I ▼ 人へ風橋絡・柳奥書陸菊ナ中いや黒 の寄貨の大ののでは、 日満、日満 から . 高い、一番さん 書 • 寿小 拝宇馬松 出本・選踊 受由 んとご松



- 65 -

53年度二賞発表句会

文化 会館

10 月 8 H 午 6

ライバルを意識している順 順不同とは日本の狡いたいくつなスピーチ続 霊柩車に乗る順番の 円卓の席に序列の だわ んがりと頭 ッ くつなスピーチ続く ない嘆き わ

順不同等と人間わずらわし 順不同不満の顔 だわりは順序不同の文字に秘めっキリと差別している順不同んがりと頭は利かし順不同でいる順不同のない和み。 が隅に居る

不同 不同 n 8

祝福も手荒く河内

責任を回避している順不同 女文字順不同を妬いている 女文字順不同を好いている 所不同三女が先きにハネムーン 順不同三女が先きにハネムーン 横槍が入ると困る順不同 クラス会出世は昔と順不同 順不同隣りも向いも好かん人 順不同大先輩に酌をされ 順不同大先輩に入間土になる 順不同大集をすこし持って行く

鬼の面

をされている菊沢小松園氏が獲得。

進

柳宏子・美幸・記録

Ī

鬼遊)

句会出席者芳名はP55に。

(受付―与呂志・重

人・敏)

·たけはら」誌へ、毎号 "作句教室"で選評今月の月間賞杯は、これまた竹原川柳会の

不同儲け頭へ気をつかいり出しに戻して決る順不同 れも傷つけたくはない順 不同愛の都合で嫁く妹不同と確かにことわりましたのに 不同極楽行へ天の声 マンの席をあけとく順不同 不同

誰にも

百歲

小好文美凡 松 園郎秋代郎

順不同みんな気楽な顔になり

順不同出雲のは

の神に忘れられ明から座る宿の朝

天み鬼吸和 ず 遊江子

リー

トに少し

不満な順不同

私ほんまや順

郎

山 内

バのの

祝福のあふれた貧しい膳囲む現ナマで祝福される有難さ 逃げ水のように祝福聞いている祝福へ負けて悔いない盃を挙げ 祝福をされる立場で息苦し祝福のあとへ小言をつけ加え 祝福も受けずふる里遠くする 祝福が満場一致とはいかず祝福の宴でぼつんと苦い酒 **福のなかの静かな松葉杖 福の隅に小さな母が居る** №の祝福じらしているパンダ の拍手の中に立つ二賞 この輪にかこまれている疲れも祝福されない児をはらみ(の祝福カメラへ笑わない のうしろに奥さんダブってる の今日は泣きごと言えません の電話は孫にとりつが つってもらい祝福してもらい 裏を覗いている妬心 はずして祝福受けている の人どなる 3

祝福の拍手に敵も居るだろう気がかりなまま祝福の淵にい はるかはるか祝福してもろて 3

村

深さあ

静 雀 吳 呂 志

太茂津 選

根病ま

題

古方

根があるさかいまだひょろひょろと生き ただ神に祈るしかない根の

い根を後生大事の浮草で

の根も精

10 3

上りの姿のままで松枯れ

一敵を見返すことも出来ず 敵 敵 敵と思えど己れが小さすぎ の倒産を聞 さは宿敵の 0 へ幾たび立場変えて見 盃は素直に 3 裏の 淋しい日 列に 死に

根を分けた日から倒れぬ草の意地 やわらかい土にひ弱な根が根付き 雑草の根を引き合いに励まされ

にもたぬ和解に強く

押す拇印

千岳滋滋弥薫滋英 万 子人雀雀生風雀子

浪曲が好きでやっぱり宿敵か 宿敵の娘に息子恋をする 宿敵の娘に息子恋をする 先方は宿敵などと思ってず

美和子

代

根っからの悪人自分を信じと根の深いところに父と母の花

いっからの悪人自分を信じとき

根も葉もないことを無口のせいにする

柳岳水蘭

客

よりそうて二本の草が根を下ろす

根まけをしている男の子守唄

草の

ヤに根を下ろして嘘のない生活

根に水欲しがらぬ意地がある

宿宿宿敵敵敵 宿宿 一敵と今日手を握る顔を剃る を追う時鈴を鳴らさない の笑顔に負けたなと思い

こぼれ陽

3

は生命の姿です さに気付く 人それが譲れない

、根無し草

絶をもってい

根をのば

す 3

雀踊子 美巳代 凡九郎 としよ 11111

を仏の顔

とはずむ男の酒の味

低はきっと拒ね の温 5

からの職

と筋の道寄り添うて根を下す

根を食 日七

べた男の の日もあ

反戦 h 悪い根を断ち切る剣は錆びている 根は一つ幾千年も夫婦松

-年経る が指を鳴ら 唄うた唄を唄うてみ しっぽを振って来た誤算 宿 敵は社長 している月夜

赤ちゃ荷

お女に ライ

ルの

笑顔に厭な予感する

ちゃ屋へ孫の笑顔を買いにはあんな笑顔もする社長

D

やさない笑顔の下に打算あり

しがみつく根だから岩もしかと抱き根まわしが出来て夕陽が美しい 岩と根が信じ合ってる崖の松 しさにひかれて根気に押し根が他人の貌をさせている を削る刃に迷いない ぬ根は切らればならず捨てきれず 6 抜かねばこれも抜か 切ら ねば n 小松園 太茂津 文秋 馬 花影に 宿 宿 敵にぱったり会うた抜け ろかすに言う宿敵 から 3 がが 0 五に ひそむ宿敵見逃がすな 養老院の株を買う 老いて笑い合 猫撫で声 6 中

妻は

ほ

8

失 登美也

宇鬼和鎮宙

風 選

一文×十千枯 史 三 夫 秋 女郎 子 梢 好 子方生秋笑的夫秋女郎 宿敵へのこす一発きりの弾丸 宿敵の王手王手の夢をみる 宿敵がなつかしくなる日なたぼこ 宿敵がなつかしくなる日なたぼこ 宿敵が死ねば私も死ぬだろう 宿敵が突うと放屁一発す 宿敵が突うと放屁一発す 美酒を酌む杯宿 眼を見る俺が映

一敵のし

いってる

~

のこうもり傘が太刀に 見え

111 香

の笑顔上手に使いわけ ターに合わす笑顔がしゃちこぼ 貸さぬ笑顔も 持って 1, 3 登美 選 也

ちゃんの笑顔つっつき合う笑顔の荷がすうっとおりていく笑顔 の笑顔だってあ いく笑顔 h 千寿子 馬 名

営業用

+

"

コ

7

シャ

ル用

鬼好柳宏子 千万子

美巳代 子 花雀太遊子彦

酔喜岳

美和

最高の笑顔でダルマに眼を入れる

すぐ消える父の笑顔が好きであ 感化院笑顔の子が一人いる 振り向けば笑顔のままでいて呉れる 隙だらけの笑顔がとても美し

3

雀踊子

金 挂

展 故岸南柳氏ご んでお悔み申しあげ厚く御礼 しあげます。 費として拝受しました。 遺 族から本社 謹 発

乳母車の笑顔へ大きな賭をする 母になる笑顔が浮かんで来る受話器 背を向けた途端女将の笑顔消 爽かな笑顔で廻す車椅子 の涙 は笑顔を捨てて泣

笑い袋は笑うばかりで顔がない 人形の笑顔がとても哀しい日 笑顔では迎えてくれない販売機 芙巳代

> 主役待つ大きな微章 泥舟の狸にされ 今日だけは主役古老の ている主役 一だけ残

完全に主役を喰ったアドブリよ 中卒の父に主役の椅子を買う

バースデー主役が握る補乳瓶知事さんへ今日の主役は寝たっ きり

主役の名刺に肩書刷ってない 主役となってさみしさを喋べれな 初誕生主役なかなか笑わない 健在の老母は主役の座を守る ちよこまかと動くな君が主役だぞ 泥舟にみんな主役を乗せたがり 壇上の主役ボタンが外れてる U

一好遊生好志志

席

題

当日発表

柴田恵美子選

投句拝辞·

主

寝屋川

市文化祭川柳部 各題三句以内 なかなかの司会主役をこきおろ ほどほどに喋り主役の顔を立て妻の前でも主役でいたいのか

U

宇紫和失鬼冬宙

屋

JII

市

民

大

会

11

月 5

日 III

日 柳

正午開

場

市立総合センター

磁野

いさむ

小路選

金木犀秋の主役という香り 貫乏籤引きましたよという主役

ご近所の喫茶で待っている主役 主役になった時から背なが黄昏れ 往年の主役裏番組で病み 河内から馴れぬ背広で来た主役 先頭の今日は悲しい喪の主役 まっ先にくる主役なら引き受ける じっとしておれず主役が擦るトロ アンタが主役秒針は止まらない 黄金分割のところに主役の椅子をお ャラのお高い 0 6 混 h D 3 美和子 惠美子 小松園 凡九郎 栞 紫紫弥度小 代

北極点に今立っている笑顔 ボーナスを受取る妻の笑い顔 税務署でうっかり笑い顔をする 悲しみに馴れた笑顔に隙がな

千水天史智智失失 万 子客笑好子子名名

L

拒絶する時も女は笑顔見せ

産声を聞き母親となる笑顔

1

笑顔で聞いてはるうちあれを言っとこう

寿美子

宇宙太 としよ 潮

岳

聞き流す笑顔へ負けたなと思い あどけない笑顔に言葉などいらぬ 少年の笑顔見ているカブト虫

モナリザの笑顔に心救われる

柳 兼

会 日 話 場 時

太

屋川

自

曲

広 報

内千代子選

こころ 橘高 亀山 田英比古選 薫風選 恭太選

くする川柳会 寝屋川市老後をたの 5 E: III 柳

柳わかやま百号と 場 句 集刊行記念忘年句会 昭 和53

111

和 百 歌山 市和 年12月10日(日)12時開 歌浦

萬波楼

場

(読込み可) 「記念」 「茂る」

兼 会 日

一題当日発表

(読込み可

その他詳細逐次発表 六千円 (句会費、 忘年会費共

選会 席

河井庸佑

- 68 -



見て 心にも

ならぬ

見た胸 でまる ル

から 世辞 6

志を燃えた

める夜の蝶

楷書。 七字以内の句に、下三マスに雅号。 かならず原稿用 締切毎月末着便まで。 紙に 21行以内。

ペン書きで文字は 衿あし ての 席を設けて置 人も脇役のれ いた下心 んの

対決の日の根廻しの餌 上品な顔をして勇猛心を秘 安物の餌に釣られて空財布人間の脆さ上品を捨てる夏 まき餌だけ食って口ふく優等生 どんぐり川柳会 に餌を仕掛けて待つ女 をいきな浴衣で夕涼み 野を撒く 80

酒が好さ 空 っ風

弘寿独知《石柳観早自律民 朗朗步惠女菜風洋苗然子子

谷垣史好報

U 18

ターンはもう許されぬ男坂 レットへ空をつくろう青をとく

あぐらかく仏はビールなど待 晩酌の父のあぐらにある疲れ まだ敵の良さを探してやるゆとり あぐらかく女仏になりぬべし たぬ

下街の賑

街を出

れば夕陽がもう沈み わい地下を忘れさせ とぼけが上手な

つこく迫るコマーシャル

もとばけて通

ず怠け ママにある人気

和

武

助

世界人民治郎

来ばえを見てる人形師のあぐら

筆とれば背すじがのびる文机 手まねいて露店の夫婦灯を入れ 人間のもろさを海は笑わないたとえばの話がつづく母の夜 生きている実感汗をぬぐわない ただ今と帽子が先に飛んで来る

風幸

客

2

の先は聞くまい傷をえぐるだけ

の鮎とは見せぬ塩をふ

うみなり川

林由多香報

賽の目にあぐらは遠い国の人

単身赴任というわびしいあぐら

薫吸小好 松鼠江園郎 恵美子

初対面

吉打吹川柳会

奥谷弘朗報

あぐらから正座にかわり負けを知り

探して蟻の

一生か

師

の影を抱けば鳴り出すハー

・モニカ

あの日も空が燃えていた

わだかまりふとギャンブルに向いた靴 照明を受けて役者が影と舞い サイコロはどっち向いても罪づくり

富盛静美湖桜枝

葉士人

きみ江

登美也

則

て見ればさほどの顔でなし

いつからか忘れ

「の安堵親しみやすい鼻らか忘れたセルの肌ざわ

h

もう一人の私を探す聖書繰る

あぐらの

まま命に関わる話しする

操白春佳加光子子栄生仙

の星

探

して満されぬ女

春佳加み富武 ボ生仙ほ子助

怪談もこたえぬ程の熱帯夜 旅に来て夫婦らしさを取り戻し 二日酔朝に決断した禁酒 故郷の母の匂いのハッタイコ ふるさとへ着いたとたんに出る訛

手さぐりで探すと冷たいも 後は終らず現地で捨てた子を 減があってはならぬ教師 のに触れ を探 史勝瓢

うしろから呼ばれて金魚屋に影

がない

雄

の中に踊る娘に亡妻を見る

ンブル

に強く酒にも女にも

が一座のネジを締

とぼとぼと歩く敗者に影がなし 森井菁 英かつ子

負う影

逝き人思い起せと閑古鳥

たてまえは本音でいつも裏切られ 潮時と言っても決意出来ぬまままだ老いぬ人切々と唄の艶 サラ金があれから鬼より恐くなり

千重子

平凡

な父から学ぶ事ばかり

抱く夢が色褪せそうな年になり

子に送るラッ 生命美しく渚に立 がもうなくなり いし 追うて追うて不惑の荷を背負い 15 ルは い 丰 3 勲章ほ ウを漬 って をどう見てる いる しくなる け

巳子幸夫路朽

岩壁に平和 の声を刻まんか 梅を漬

ワンマンの父へ味方は母ひとり 追憶の一コマしゃぼん玉がとぶ さりげなく席をはずして 雨に濡 貞寬鈍松 政房蘭節一不

子子舟緑

文敬菁

西静紫笑鬼 合水光子焼晴子居

-69

3

古手帳貧乏しのいだ日の記録 温度計涼しい朝のままで欲し 温度計涼しい朝のままで欲し 場ので、糸の範囲で踊ってる 村塩になりゆく人生が寂しいなあ 本物の警察手帳にだまされる 城北川柳会 横いの旅へ無邪気にはずむまり うれしさにはずむ心の正直さ うれしさにはずむ心の正直さ 方歳の声もはずんで植樹祭 神に一礼、いつも陽気ではずむ気で 神に一礼、いつも陽気ではずむ気で 神に一礼、いつも陽気ではずむ気で 神に一礼、いつも陽気ではずむ気で 神に一礼、いつも陽気ではずむ気で かけばずむがはずむ女にない時計 おしゃべりがはずむ女にない時計 おしゃべりがはずむない時計 おしゃがよかれてはずみ出し 野子へ親子の運動靴はずむ 背信の息子へ蔭膳絶やさない盆踊り暑さ忘れた声はずむ はずむ声賞品片手にかけよっ お祭へ今宵の膳もはずんでる 茶漬の味を忘れていた豊富 度計私も狂いたい ます嫁に団 の言葉一つで納得 便屋さん知っている 扇の風送る する ま JII 滋雀 弘 道満弘人ふま炉三行喜秀右テき恒千道寿敏生無津 す 十 かく マラチ生美みえ斎四有洸村近ミみ治子子馬 人 とし江 保由貞洋豊笑善 多香山々生王堂 報 出来ますと答えた手前投げだせず出来る人あとからゆっくり現われる労働の汗はあかねに汗光る その時は身近な他人にある親身 夫がいちばん身近と思う日の孤独 技術人で身近になった百度石 逆転に期待がかかり帰られず 頼りない釘づけパパの棚が落ち メンバーの一人が蟻の穴あける 女王蜂居るメンバーにある掟 口かたいメンバーだけの酒になり 手を握り合うて動かぬめぐり合い 動かない奴ほど理屈とねまわし がむしゃらに動いて妄想から逃げる 働いた汗の匂いで父帰る
をっと拭く汗は四角に折り 陶工の汗ひたむきな夢をかけ 銭出してサウナで流す汗もある イ生の余白へ今日も埋める汗 してみたら引越ししてた海 川柳会 わせて熱を出し りたたみ か愛 二三報 宏笑正川東育与 在 至 至 新和子雲園一 ジャンボ化の時代に光る山椒の実予定日が来てもこの子に父が無い無力な虫へ殺虫剤が効きすぎる 葉の花句会 高杉 セールスは予定に明日を攻められる伴奏を入れるときれいになる別れ無力にも味方があるぞ瘦せ蛙 怪獣の土産泣く児もすぐだまり 帰郷して母 向う帰 スは予定に明日を攻 所を集めた児が生れ帰郷がしたい汗に生 められる 大坂形水報 高杉鬼遊報 三十 美狭子 生幸風 雄

— 70 **—**

ジャ 怪獣が来てから社運盛り返 徒歩だからこころゆたかに秋拾う ママ ダ 無力な日小鳥の水を変えてやる ジッヤボから痩せた元首が降りてくる 酒飲むと怪獣になるくせがある 会社より妻が無力を知っている 歩ならば日本の国も狭からず ルマの目予定はとうに過ぎている 一獣のくせに空手を知っている ンボ機に水鉄砲を向けている ゴンは相手次第で猫になり ンボ機に反対した人乗っている 守夕寿勝 宙 太花馬美 酔秋栞豊

一袋が鼻緒のかたい下駄を履く 植村客遊子報 紀美代 みずほ 月

思い出へ再び訪ねる旅の宿 習慣が色濃く残る山の里 大いちょう下界を見下す五月晴 意地だけで生きて素足の仁王立ち 言訳を相手見抜いて聞いてくれ 月 男水楽風

嬉

しい日足も飛ぶような下り坂

人だけ下り坂とは思ってず り坂と見てか保険屋素通し

客遊子

相場欄肌にこたえる下り坂

上り下り下りがつらい膝がしら 借銭で下り坂ともいっておれず 自信ない言葉の裏に下り坂

武骨者ですと愛想よい父になる 山男雲海に佇ち満ちたれり 母を呼ぶ小さな家を設計し

老らくの大吉と出た日のデート

柳わかやま

津田与史報

千寿子 太茂津

花道を背中で泣いてゆく喝来

蝿を追うて話題を変える老夫婦 煩悩の闇で揺れてる赤信号

喝釆をきっかけにした大欠伸

赤信号の向うで友が呼んでいる 人並の暮しに蝿も二三匹 病院のベットへ蝿の古参顔

手の平で目玉くるくる雨蛙

産寧坂雨の歩巾の石畳

結局は酒が責任負わされる 金で済む責任背すじが寒くなる 耳の底あの日の喝来まだ止まず 喝釆の隅で一礼する涙 この判の責任どうするつめる膝 責任者出て来て渦が大きなり 喝釆の余韻の中に足袋を脱 責任を被って箔をつけたがり 赤信号ゆっくり待っているゆとり エロの真似がうまくなり 正勇富光善天与英公

0

目

7

0

日

皆忘れ

佳水杜芳 似 子客的子

御紋章

万的

和弘

呆れてもわが子に匙は投げられず 辻圭水報 白光子 頼緑

不況風金蝿までが居なくなり 冬を起す蝿にも似てる嫁の意地

海電鉄川柳部

(大阪市)

下り坂とみせぬ強気をかいかぶり

松川 杜 的報 朝 正綾誓

鼻薬かがした自

あ

わ

7

せかけて女の髪の

匂

雨 61

花 うな

落

小松園風

混浴にとまどいながらそっと入り 改造を知らずとまどう地下出口 親類までよりつかなくなる下り坂 定年後は自分にきつい下り坂

京都塔の会

ままはお互いさまと老夫婦

ふんわりと釈迦の両手の中へ尾 骶 骨から 脳天へ 昇る

衣紋掛つ

かれた型で今

日

ってひまわり笑ってる

美雲信風

宏圭摩天水郎 太子代彦彦史子子 片減りの靴がのんびり型に見え 本番も別に変らぬのど仏 0 八卦に見て貰った事は云わず嫁く アベックに八卦うれしいことを云う 宵闇に美人とわかる八卦の灯 五分五分ののぞみ託してみる八卦 パスポート国籍意識よみがえる 夜光虫海の星座になりたくて モーニング脱いであいさつ 本番になるとやっぱり落着かず ハイジャックのパスポートにも んびりとしていて小耳よく動き んびりとしているようで油断せず旧柳塔まつえ U 切って空洞にかえる口達 川柳塔まつえ 佳句

松町

紅報

地 10選 (前月号から)

闘志を燃 石なげて波紋見つめて テキストにない母さんの味 想の灯上げれ やす沈 信黙 5 < 0 61 眼 3 があ が 憎 好た 孤 独 61 弘 風仙太洋朗花然

71 -

快

手に職を一人で生きてゆくと決め 上役の誘い断る語を探す 信号へ盲導犬は確かなり 信号の直下地蔵の赤帽子 信号へマナーよろしくランド 夕立が廻り舞台のように晴れ 夕立はとうに霽れたにまだ詰まず 夕立が止むまで保険すすめられ 千金に勝る夕立掌に受ける 掌の皺に老いの生き甲斐云い聞か 生きがいと別に毒舌持ち歩き 生きがいを見つけてからの病抜け コップ酒今日生きがいの浸みる音 生きがいは瞳と瞳に嘘がない 一億が食っても崩れぬ米の山 人去る男の背なにつむじ風 友が誘うてくれたタイミング ターン故郷の山に背かれる やどり夕げのにおう軒を借り ひだの中に虱の如く住み 太平洋にまた命日がやってくる 刈りをした手では んびりと見える村人 川柳高知 に裕衣姿の似合う女 い山は静かに笑ってる が錆て が待っている 堪えている ない家出 ım いる 豆 七 河原み 0 ル JII 娘 竹松 せ 0 文近ゆ越 う 平江也山 る報 青紅恭白久松秋麗 風 五絹秀 みのる 越可 百無素老宗 合子聖水萩珠 叮千舞通鶴 子峰 果笑一水江風翠 紅草吉児丸和 奥の手がうすら笑いの中に住む 仲人が好条件並べて熱を入れ条件は人の弱味をついて来る 無職でも気前がよくてついて来い 無職でも年金だけで好い夫婦 長命も子なく孫なく金もなく 長命と褒めて裏では欲婆 長命で三代揃って渡り初め 長命が老人ホームで愚痴を言い 長命が瀬戸大橋を渡る夢 奥の手はいらぬ肉親との対話 奥の手は九回裏まで見せられぬ 条件を付けては見たがついて来ぬ条件が揃って子等は励みだし 旅に出た実感訛聞いている 緑陰に風わかち合う小休止 雑草は雑草なりの実で足りる 禁煙のあかりが煙る映画館 老妻の小言の中に酒のこと 日の丸へ青春の血がまだ残 敗北の投手に空が青くなる 金で暮し残している無職 人が無職の脛を嚙りぬき もかも捨てたい心海に では 川柳後楽 東大阪川柳同好会 ひとりの音で今日も暮れ カメラの隅にいる ぬ帯 (岡山市) を 向く 呼 井上柳 三十 Ŧi. 美節美海桂菊芽 和 子子江州緑野十 一四報 久定照博 米 雄平路友 博み原友し たけ志郎 宏胡哲 柳秋草元正恒 郎 虹 亜柳宜 報 由美 大風郎 一道洋柳吾 月 風 T 米の値が汗を知らない手で決まる 唄と絵に残した淀の水車 寡婦になり華にロマンをかけて生き 飲むだけで後はそしらぬ友だ彼 新聞でへそくり株価へるを見る 新聞の切抜き溜めている賢母 肩書を脱いで楽しく飲む同期 西瓜甘し喘ぎの日々を蘇 受験前社会面から読みはじ 生きたけりゃ飲むなときつい聴診器 ストップのない悲しさよ流れ星 セコンドのタオルにやっと救われる ふる里で聴く雨だれは母の音 雨だれのリズムに長い夜となる 年上と見られたくない若作 太縞を着る年上の恋である 定年をやり過したい若作り 自惚れはまだ持ってます若作り 年下の夫好みの若作り 水車飾って此処はチェーンの 水車小屋壊れた侭の過疎の家 其の気なら土俵無限の円である 裏長屋円の値うちは変らない 円高でよく儲けました試算表 円高で足蹴にされる小企業 いきりオ へ眼鏡おく夫かける妻 ャツの胸に時世の絵がおどる 西宮北口句会 デコを 足跡見逃がさず 打った非常 3 8 田舎そば 世子報 婦美子 と紅泉〆 女扇女女 千世子 美代子 滋信 柳宏子 鬼湖孤 欣多楼 洸 あいき かずを美

遊風舟彦公風

甫

万的

そんな 円高の お手の が旗と日 虹 方の気勢に だけ III 新 1 40 聞があ 1 Ŏ 経がある社長室 笑えと自 新聞読 3 の社説で新聞値 で鰯包まれ ぬ手拭いふところに 負 けた旅 信 もって 朝 3 0 山 いパ組の 上げ いする

クー

ラー

の部

屋でひえびえ愛冷える

と虫愛して星の名は知らず

級らしくクーラー冷えて

カン

67

から

6

3

武惠光琴

干羽鶴快復待って空へ飛

T

まり

切りの西瓜で足りている夫婦

初孫を抱いて参道初鳥居 母校から遠路はるばる寄付が 他愛ない話を聞いて暇つぶす 早朝のマラソン老女も一人加わりて いごと日中和平まず叶 び逢うスリル素敵と言う女 知らず私生児よく太り柳倶楽部(唐津市)新 ったのかという主 来る 新岡 奎 天子報 ひろ坊 一嵌朴岩紫実 Ŧi. 薫寿静伊ろ正半め 風馬馬升山祐歩る 竜光浪

辛抱強

い女悲し

い過去を持ち

もやもやをスペクトルにして飛ば

人形の

顏

でモデル

は

歩き出

3

メ 亜博三右 女成泉子近

プラモデルとつと

つ父の一人ごと

のない子にだけ見

える星がある

美しくある為モデルは堪えている チビッ子のモデルにママは附きっきり

右一亜野

心子生

宮参りも

0

てと愚痴の座を設 たか水死の子 博泉報 回虹 掬勝 春一 天 子汀 治一吉 竿

> 流れ クー

星あんな消えようし

to 61

6

中 0

筋

報

歌山七面句

熱帯夜犬の鎖を外してやる

ラー

より

開

けてみなは

n

蝍

時

E

風水方路

薫形古 小度〆

私がただ一人知っている裸

匹の蟻働きすぎだと思う

汽車を待つせめても母が持つ!

鞄

孫達が去って障子が破れてた

冷えた茶も

飲まず

が棚経駈ける

神主が愛想ふりまく宮詰 薬石も効なく今は神頼み

5

水に行く暇であ お父さん聞い

5

ての

村の

医師

は鞄と共に老

10

三井ケ丘川

柳会

さクーラーくたくたに 正面子 洋好晴 子風

新婚のはげ

人服売場の鏡に俺がい

瞬きが手

も見える秋夜長

房利い

てくる

天の星が宇宙の人とする

2+0

80

てる夏休

中市

星見る権利与えられ

肘掛の椅子にゆる鞄持ちの苦労の活 心带夜· 0 の荷子にゆって、の荷子にゆって、の荷子にゆって、 荷をおろせばどっと老ける父夜女の肩が起きている りと肩をおとした定年者 # 痛少し 張り向く顔や人で 治 世する

ス

1 ス・ ・スパ

項す

谷寿

・スピー

チ

スピ 馬

書きもとれてはだかの水をまき マン 周富勇隆や輝知っ光 よりな恵い夫也ョ治 愛秀晃周富勇隆 子雄

> 回お深 か呼 えりのして 「椅子廻せど思案まだつ」 鞄は今日も浮気する か

> > 三淳世昌 幸子津郎

あけ

d* H

柳 誌 . 兼 . 席 2 52

題 課

路 集 題 表

年: 11号

-73 -

• 募 集。

課

各題 (3句)

5

句以内)

課

題

吟

各題5

句以

内

薫 水

選

客

選

栞

贈

b

芝

橘

高

薫

開 羊

宫 内

珠

笑

選 選 水 JII

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。 ★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。 紙 水 粉 選

煙 柳 月号 抄 塔 10 10 発 句 句 表 IE 九 $\widehat{11}$ 月15 本 尾 日 締 水 切

栞

選 選 選 愛 水 JII 二月号 染 煙 柳 塔 帖 抄 (3句) 10句 発 10 句 表 橘 IE. 12 月15 本 高 尾

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。 字は楷書で新かなづかいにしてくださ 津 冮. 松 īE. 与 風 朗 史 文 選

本社十一月句会

会席

費題

兼

題

枷

力仕事」

正若西香

★投句だけの方は切手百円封 釣 り合い 当日発表

各題

内敝

入

地下鉄堺筋線 X 話 鰻 271.3 長堀橋 (今月の出 9 町 田 下 車 10

電

会 日

場時

属月

七日

火

午

一後六

+

本柳田川 是三句以中 納 旅子 本 本 本 花 3 東スグ 5 選選選選

★電話での投句や訂正はご遠慮願います 大阪市南区鰻谷中之町20

柳

1

8

(不二田宅)

社

巧 電

塔

「雑 唱

技 12月の兼題 停

本社

1

0

不急のご用件は、

なるべく書面でお

17

67

to

ます。午前中と夕刻以後のお電話は06-718・32

「物 i

常任理事会は11月2日 5時から

昭 和 五 五 印発標 発行所 十三年 刷行集 大阪市南区鰻谷中之町二〇番通 電話 大阪・二七一一三九八五番 所人兼 郵便番号 摄替口座 大阪・三三三六八番 藤 中 月月二 原 島 柳 542 -+ 童 -五日印刷

社 郎 一半年年 定 分分 四 干 百 八 (送料 百 百 円(送料共) 円(送料共) 29円

日 締

切

年賀広告受付

用ください。 グループをおもちの方もご利 本誌五分の ★原稿締切・十一 一段二千円です。 月 末日

あなたもゼヒーロ

です この寸法が 柳 三三三六八7 4 塔 0 0 社 円 番阪

- 74 -

会費が切れるとご不要とみて送本を中止

ま

ンペン草

あ

h

中にまだそれがあるは

水さんの「谷町

売り切

肉体疲労時の (脚気) ビタミンB、補給に

こり・腰痛 神経痛の緩和に to ☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミ

それでは出

ば死神や厄病神 ほしくない

お許しを得て、本号を飾 んでいただきたく、先生 で、みなさんにも

紙をくださったので活字にに、藤沢桓夫先生が『谷町』 お礼状なのだが、さすがにんがお贈りした「谷町」への 号あたりで売り切れの広告 いただいた。薫風さ もう 本誌の読み物の二本柱はゆ風柳多留廿五篇」と共に、 ね ★年に一度8氏よりご登場 第4回はたらくうた ★東野大八先生の 岡田甫先生ほかの、「誹 号を追 って快調 柳

本がないとのことた。 を出す予定のところ、

方には申しわけないと思 がえないので、未出場に

させて

I

V

▼陰暦10月、全国の神様 松江市の佐太神社は毎年 松江市の佐太神社は毎年 お出雲にお集まりになる 神送りをする。 5 濁ると云われています。 になり、 川は神が足を洗う為に 神の宿りを示し、 境内の松の枝が下 願うためらしい。 いる神や厄病神にお立 11月25日諸国にお帰り 30 日にもう一度 居すわっ 前の

> Ti. 泣きごとなど書くのはもっ ていたり、 ると何字かそのままになっ あたりまえだが、 六十ある。 違った活字が入 全部直 ij いるわけだ どうかす の文字が 屋 だから 6) って

協力をお願い 校正子の責任になるのでご 毎号百字を越える。 稿そのものの誤字当て字が 係もあり、 ればよいのだが発行日の関 ったりしている。三校をと 悩みがあるとお いします。 どこの柳社も同 もう。 これも 原 共にコド だった。 10 泊 0

市 百々之助のこと

刊を見落としていたようだかつ千万、一月十七日の朝かつ千万、一月十七日の朝 った。(二月号の校正中) ★昭和の初期、 う彼の 優市川百々之助が 知ったことだが 「百々ちゃん画 画誌だった。ぼくの 近く出ていたので儲 柳文学 3月号で初 個人誌があっ 映画の全盛 月十 1:0 枚をぼくへ送って来た。 行くため彼のブロマイド干父にもつお嬢さんが、嫁に てしまった。 を創刊するつもりだったがは彼の個人誌「桃色の壷」 うのは彼一人だった。ぼく る。 三本も主演映画 剣難 で預っておいてくれ 身上の都合でダメになっ 八週間 其映画会社の副社長 当時月給千五百円 ーを作った年に二こ 間ほどのロン 彼 を撮

うに使えば五万~六万に価 ぐらいは食べられたし、 するだろうか。 まれた金額である。 一夜遊んだうえに朝め ミナミの芝居裏 れたものだ。 元

下で、市川右一 代映画の始祖) ちゃんこと尾上松之助 谷川一夫)が彼より二つ年 気者だった。林長二郎 ★百々ちゃんといえば が一つ年下だった。 いらいの (市川右太 夏 人

松島なら二回は 時松 В され、 うである ものは今も昔も変りな である。 阪東妻三郎、 おこしたり、 ★帝キネを出 ファン気質という

一 曲 さんが吉本喜劇の平参平氏う凋落ぶりだった。彼の妹は片岡千恵臧の口利きとい というグループがある。 素人ばかりの「勝山寄席 ある。 出して消えてしまっ 歌手志望らしかったがレコ の奥さんだと聞いたことが 復帰したりしているうちに ードが売れず、二枚ばかり 大河内伝次郎などに追い越 0 そして彼の娘さんが 日活へはいったとき 住んで 長谷川 また帝キネ 3 鹏 プ

のファ とい か いることだが、泉下の秋日がつらいので逃げまわってのところ雑用のふえること かつぎ出しに来ている。 で相当口達者が揃って いることだが、泉下 それがちょっ 達者が揃っている お そこからぼくを 叱りをうけぬ の秋田 いるの

Ш

柳

塔

南紀 和歌山 四国でのお泊りは一

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉---忘れえぬ はまゆうの宿 政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック 政府登録国際観光旅館 鳴門

政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉 海に浮かぶパラダイス

政府登録国際観光旅館中の島

湯峰温泉 山のいで湯で山菜料理 政府登録国際観光旅館湯の峯荘

和歌山・新和歌浦―海岸美が楽しめる 大阪・なんぱ――清楚で近代的なホテル 政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門――うずしむの宿

政府登録国際観光旅館鳴門公園ホテル

紀北・橋本 -- ゴルフの宿で季節料理

観光旅館

紀の川苑

大阪・泉南淡輪――魚つりに ゴルフに

観光旅館

淡の輪苑

ホテル南海

お問合せ・お申込み 南海国際旅行・日本交通公社 サービスチェーン大阪案内所 ☎06-631-0222



★ 南海電鉄



宮内庁御用達 菊正宗酒造株式会社 神戸・灘・御影

番よい酒

うまい酒

清